
十一ミス研推理録2 ~口無し~

つるめぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十一ミス研推理録2 ～口無し～

【Zコード】

Z8921V

【作者名】

つるめぐみ

【あらすじ】

同時刻同現場で起きた殺人事件と飛び込み自殺。被害者は死亡、被疑者は意識不明、重要参考人は被疑者との関係を否認。その事件は関係者たちが語れない『口無し』事件だった。都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部の部長の東海林十一朗は、警視庁刑事部トップの刑事部長の一人息子。思わぬ展開で『口無し事件』と関係を持つた十一朗は、部員と周りを取り巻く刑事達と共に事件の真相に迫っていく。【口無したちが隠す事件の真相と動機とは?】+ -ミス研推理録の第二弾となっています。第一弾のネタばれの要素もあり

まあので、『トトロ』の上でお読みいただけぬと幸いです。

0・プロローグ

その日 戌の刻に降つた僅かばかりの五月雨さみだれは、地上を潤すとともに汚染された空気を一気に浄化した。

予報通りに降つてやんだ雨に応え、さされていた傘が次々と畳まれていく。人の足が滴を跳ねる音と車が飛沫を上げる音が、自然界と人間界の混合曲を奏てる。

創作された小さな水の溜まりが、車の前照灯の光を反射させ、通行人と構築物を照らした。

その光を神秘的な光芒と捉えるか、怪奇的な妖光と捉えるのかは人それぞれだろう。

冬に創作された土壤が放つ腐葉の臭い たどり それを清々しい森の香りと喻える者もいる。

人にはそれぞれの感性が存在する。そして刻み込まれた本能も存在する。

街のネオンたちは眠りにつかないが、人が生物である以上、休息の時は必要となる。

都心の終電は遅い。しかし近隣住民の迷惑も考えられていて、轟音の源みなもとである電車は、日付が変わった頃にはとまる。

都会の喧騒から離れた場所なら、更に足が尽きるのが早い。うつかり終電を逃してしまえば、とんでもない交通費を払つて帰宅するか、粗末な場所に厄介になるしかないとある。

駅裏に存在する隠し居酒屋

その中で新入社員歓迎会をしていた会社員一同も、終電が尽くることを理由に暖簾のれんをくぐつて外に出た。

新入社員歓迎会といつても、彼らにとつてはかたちだけのものだ。飲む口実に過ぎない。

二次会の話も出たが、一人の会社員男性は断つた。長時間、電車を乗り継いでいかなければ帰れない場所に住んでいたからだ。

今、出なければ最寄り駅に繋がる終電には間に合わない。

会社員は、ほろ酔い状態のまま皆に別れを告げると、駅へと足を向けた。

雨が降つたのは彼にとっては幸運だった。冷やされた空気が酔いと火照りをさましてくれる。このまま駅構内に入つてしまつと、何が起きるのか本人も予想がつかない。

頭上に広がる夜空には、満月と星の煌めきがあつた。数時間前には天上を覆い隠していた雲も、薰風の脅威に負けてしまったようだ。そこは会社員が数分前にいた場所と比較してしまえば別世界だ。人の気配もなく、時が止まつたかのような静寂空間しかない。

ただ路面を叩く靴音だけが響き渡る。

しかし、会社員は急がなければいけない時刻だというのに足をとめた。

右手の路地から争うよつたな声を聞いたのだ。それも尋常ではない怒号だ。

「てめえ、やりやがつたな！」確かにそう聞こえた。

直後に男の唸り声と重いモノが倒れるような音が響く。

先に見てはいけないものがあるのかもしれない。しかし、見ないわけにもいかない。

最悪の場面を想定しながらも、会社員は恐る恐る路地を覗き見た。そして会社員は見た。視線の先にある戦慄走る現場を血溜まりの中に、男が仰向けの状態で倒れていた。地面には刺された証拠ともとれるような、鮮血に濡れた刃物が転がつたままであつた。

刺された男に意識はあるのだろうか。おびただ夥しく出血している腹を押さえながら、荒い呼吸を繰り返している。すでに致死量近い出血をしているらしく、見開かれた瞳は天を眺め、蒼白の顔は生気が失われかけていた。

現場を直視した会社員は警察に通報しようと、懐に入っていた携帯電話を取り出そうとした。

しかし、途端に息をとめると、金縛りにあつたかのように動けなくなってしまった。

足取り覚束ない状態で、ふらふらと一人の男が向かつてきたのだ。衝撃の現場を見てしまった上に、真正面から来る異様な影を纏つた男

誰が見ても考えるだろう。こいつが犯人に違いない。では、唯一の目撃者である自分は、どうなつてしまふのか……口を封じられてしまってはいか。

ところが会社員の恐怖をあざ笑うかのように、犯人と思える男は素通りした。そのまま目的があるかのようにゆっくりと大通りに出て進んでいく。

会社員はあまりの恐怖で腰を抜かすと、犯人であるう男の動きを見続けた。

男が向かう先には、遮断機が降り始めた踏切がある。心臓の鼓動が発するリズムにも似た警告音と、血の色にも見える左右に点滅する赤色灯が、電車がくることを告げていた。

会社員は覚束ない足取りで向かう男を見て、まさかと感じ取つた。慌てて立ち上がりと、携帯をつかんでいるのも忘れて駆けた。

が、思い虚しく、遮断機を潜つた男は、線路上に足を踏み入れていた。

覚悟を決めたように手を閉じた男が、手に持つていた何かを後ろポケットに捻じ込む。

こうなつてしまえば、助けに行くのは無謀としか言いようがない。冷静に、そう判断した会社員は、踏切に設置されている非常ボタンを押した。直後に、異常を感じ取つた電車が突つ込んでくる。距離は百メートルもないだろう。鼓膜を激しく揺らす警笛音と、心臓が潰れそうなブレーキ音を立てながら、電車は男に迫つていく。微かな願いは叶わず、無常にも電車は男を呑みこんだ。それでも急停車の残響をレール上に置きながら、数十メートル先まで進んでいく。完全に停車するまでの時間は、数刻ほどだつたろう。

しかし、目撃者である会社員は、新説の特殊相対性理論をも打ち立てるかのような、数百倍もの時間の歪みを感じていた。

一分後には先程の騒ぎが嘘のように、踏切の音だけが響く時間が訪れた。

間近にある駅構内から、『只今、電車が急停止しました』という放送が流れ、現場までとどいた。

先頭車両にいた乗客の何人かは、衝撃の瞬間を目撲したに違いない。手で口を覆い隠す女性や、状況を確認しようと窓にへばり付く者の姿があった。

すぐに電車に呑みこまれた男の安否を確認しようと、運転手と車掌が駆け降りてくる。

電車前方に付いた血痕が、凄惨な現場を物語ついていた。誰もが男は死んだと思った。

しかし

「おい、まだ息をしているぞ。救急車！」

電車の隙間に挟みこまれるように倒れ伏している男を、確認した運転手が声を上げる。車掌は慌てて携帯電話を取り出すと、無線連絡もするために車掌室に戻ろうとした。

現場は戦場となつた。運転手は下にいる男に向かつて声をかけ続けていた。

その一部始終を見て呆然としていた会社員も我に返ると、携帯電話を手に叫んだ。

「車掌さん。救急車は二台呼んでくれ！ あっちの路地で大怪我している人もいる」

車掌は足をとめて会社員を見た。

「二人？」

状況を把握できないまま問い合わせる。

同時に、同現場で起きた殺人事件と自殺未遂

殺人事件は閑静な住宅街の住民たちを恐怖に陥れ、飛び込み自殺は帰宅時間に追われた乗客数万の足に影響した。

遠くでは、警察車両のサイレンが鳴っているのが聞こえていた。

1・都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部

都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部の部室は、校舎別館の最上階、階段を上がった突き当たりに存在する。

別館の最上階には、一クラスに相当する数のパソコンが置かれている教室や、映写機を設置している教室が並んでいる。特別教室とされる授業の場が並んでいるので、通常の時間帯には、ほとんどの生徒が立ち寄らない。

だから、ミステリー研究部の部員たちは静かな場を求めて昼食は必ずここに食べにくる。

父親が警視庁刑事部トップの刑事部長であり、ミステリー研究部の部長でもある東海林十一朗も例外なくここに来る。幼馴染みの三島裕貴も当然というよう付いてくる。

オマケというと失礼だが、部員の氷川零、通称ワックスも購買パン片手に駆けつける。

現在のところ、部員は二名。全員が三年生で来年は卒業、ミステリー研究部廃部という事態に直面している。

いや、それ以前に部室の確保が危うい。部室は五人以上いなければ与えられないのが、学校の決まりだ。ミス研部員にとつての憩いの場のピンチである。

しかし、その憩いの場の状況は、この一ヶ月間で一変して戦場に近い様になっていた。

「だから、言つてるだろ東海林。俺達が入部してやるつて言つてるんだつて。ありがたく恩を受けるよ！」

前は誰も訪れなかつた空間に、今は昼休みともなると数十人の生徒が大挙して押しかける。それは放課後でも変わらない。

数十人の生徒はそれぞれがある『野望』を片手に、一か月前には興味も示さなかつたこの場所に訪れているのだ。

十一郎は母の作った特製弁当のアスパラベーコン巻きを咀嚼し終

えると、席を立つた。

そして数十人の生徒たちの前に進み出て、全員の顔を反芻するように繰り返し見る。

「恩を売ろうとしているみたいだけど、その好意なら受けないよ。校長が俺達の卒業までは部屋を貸すと言つてくれてる。あと、みんなの入部理由は？ 全員が一、二年生みたいだけど、前の部はどうしたんだよ？ 退部したのか？」

十一朗の質問に全員が顔を見合させて口ごもつた。明らかに裏がある行動だ。

それが、一か月前までは来なかつたのに、今になつて訪れる理由である。

「そいつ等の考へることなんて、単純明快すぎて推理にもなんねえよ」

声を上げたのは部員の一人であるワックスだ。絶対に乱れないようじに固めた、自慢の髪形を整えながら、購買では売り切れ必至、希少価値とされる焼きそばパンを口にくわえて、十一朗の隣に立つ。

「どーせ、ミス研の名誉ある褒賞のお零れを頂戴したくて来たんだろ？」

嫌味っぽく言つワックスの口調に逆切れしたのか、先頭にいた生徒が食つてかかつた。

「うるせえ、お前と交渉はしてねえよ。お前だつて人のこと言えないだろ。推理とは名ばかりのオマケだもんな。久保の菓子に釣られて入部したつて聞いたぜ！」

ワックスが眉間に皺を寄せた。殴る数秒前だ。しかし、十一朗はワックスが拳を引いた瞬間に、一人の間に割つて入つた。二人が十一朗の行動に目を丸くする。

十一朗はそんな二人の反応に構わず、罵倒を浴びせてきた生徒の胸倉を勢いよくつかみ上げると、殺意のこもつた目で睨みつけた。

一触即発の場面を前に、その場にいた全員が息を呑む。

「うちの部員を馬鹿にするなら帰れ……ここにはお前の居場所はない

い

いつもとは違う十一郎の雰囲気に、ワックスのほうが退いた。周りにいた生徒たちも波が引くように、距離を保ちながら状況経過を見守っている。

全員の反応を一瞥した十一郎は、つかんでいた生徒の胸倉を乱暴に放した。押し出された勢いで体勢を崩した生徒は、後ろにいた者たちに寄りかかる。

絶対に言い負けしないという自信があつたのだろう。胸倉をつかまれた生徒はズタズタに引き裂かれたプライドを返上するかのように、怒りで充血した眼を十一郎に向けていた。

そんな生徒を前にして十一郎は退かなかつた。十一郎にとってミス研部員は友達や仲間以上の存在なのだ。心の友を愚弄された怒りは、謝罪だけでは收まらない。

「ミス研部員に必要な能力を知っているか？観察眼だ。ここにいる誰が何組でここに何回来ているのか、どの部に所属していたのか、全て俺の頭の中にある」

十一郎は再び、来ている生徒全員の顔を見た。中には慌てて顔を隠す者もいる。途中で退部した理由がミス研のお零れ褒賞を欲しいからなどということでは、クラスの笑い者になりかねないからだ。

更に十一郎は、この歓迎されない客人たちを追い返す策を巡らせてから口を開いた。

「だけど、どうしてもという奴がいるなら入れてやつてもいい。けど、今から出す問題を解けたらだ」

十一郎の言葉にワックスのほうが「問題？」と声を裏返して息を呑んだ。

「警視庁と警察庁の違いは？」

十一郎の問題に答えられない生徒が、相手が悪いと感じたのか、一人、また一人と去っていく。

それでもこの問題に立ち向かおうと一人の生徒が「警視庁のほうが警察庁より偉い」と答えた。これを聞いたワックスが愉快そうに

笑う。

「答えになつてねーし、間違つてゐるし。違ひは警察庁が国の行政機関の一つで、警視庁は都の公安委員下の機関、そして警察で一番偉い地位にあるのは警察庁長官」

さりと答えたワックスを見て、部室内にいた裕貴のほつが「嘘……」と呟いた。

呟いた裕貴を十一郎とワックスは同時に振り返つて見た。すると裕貴が慌てて手を振る。

「知らなかつたつてわけじやないわよ。ワックスが答えられたのが意外だつたつてだけ」

多分、知らなかつたのだろう。といふよりも、あの生徒の答えが正解と思つていたに違ひない。

十一郎は息をつくと、残つた他の生徒たちを見た。

「本氣でミス研に入部したいのなら、それなりの興味をもつて来てくれるなきや困る。それに、あの事件があつて、まだ一ヶ月だ。俺が何を言つているのかは、もう分かるよな?」

十一郎の見えない言葉の刃に切りつけられて、生徒たちは負けを認めて姿を消した。

これでしばらくは、騒ぎも収まることだろう。

部室に戻つて席に座つた十一郎が、探偵ものの小説を読み始める

と、ワックスが隣の席に座つてから言った。

「ありがとな、プラマイ」

思ひがけないワックスの言葉に、十一郎は顔を上げた。ちなみにプラマイは十一郎の名前を文字つたあだ名だ。幼馴染みの裕貴もう呼ぶ。

「何が?」

ワックスがお礼を言つてきた意味がよく分からなくて、十一郎は応えずに聞いた。

「かー……惚けんなよ。あいつの胸倉つかんですごんぐれたらる。

お前さ、俺に対してそつけない時があるから、そんなに俺のこと気

にしてくれてないのかなと思つていたんだよな。だから、意外な面を見たと思ってさ。嬉しかつた。感謝してるよ

予想外のお礼に十一郎は困惑した。向かいの席にいる裕貴が含み

笑いを浮かべている。

「正直じゃないもんね。ドラマは……だけどねワックス。ドラマはみんなのことを気遣つてくれてるよ。あの時だつて……」

一か月前に発生した公開自殺　その裏に自殺屋がいる。ミス研部の一員だった久保京子は、いち早くその陰を捉えて自殺屋に近づいた。

だが、事件に深く立ち入つてしまつたために、自殺屋の手にかかる命を落とした。その自殺屋の正体をつかんで自首に追いこんだのが他でもない十一郎だ。

事件が解決したのは一か月前。その真相は多く語られていないはずなのだが、噂とは怖いもので、どこからか話がもれて広がつた。だから、自殺屋事件を解決したミス研部の一員　という称号が欲しくて、何人もの入部希望者が殺到しているのだ。

「別に俺は……あいつが平氣で殺された久保のことを言つたから腹が立つただけだよ。それに、同じ思いを共有する仲間は、今の段階なら俺達だけで構わない。違うか？」

ワックスが裕貴の近くに寄つていつて、「今のは本心?」と質問していた。裕貴は「半分本心、半分照れ隠し」と答えた。

二人は隠れて話したつもりだろうが、その内容は十一郎にもしつかり聞こえている。

「あのさ、どうでもいいから早く昼飯食えよ。休憩時間終わっちゃうぞ」

一人が時計を見て「やべつ」「ほんとだ」と慌てて、残つたものを口に放り込んだ。

残り時間五分。そろそろ教室に戻つておいたほうがいいだろ?と思つた時だつた。部室の前に立つ、一つの影に気づいた。

先程、訪れていた生徒たちとは、全く違う印象を放つ女子生徒だ。

一直線でこちらを見る純真な眼差しは、ミス研の称号が欲しくて訪れたというよには見えない。

それに、学年を示す名札に付いた印の色は一年生に間違いない。本当の新入部員だ。

その女子生徒を見たワックスが、今にも転ぶのではないかという勢いで駆け寄った。

「君、一年生？ クラス何組？ 名前は？ ああ、俺の名前は氷川零。通称ワックス。入部手続きなら奥にいる部長にだけど、一応聞いたく。彼氏いる？」

マシンガンのように繰り出されるワックスの質問に、実直に答えようとしていた女子生徒だが、もはやついてこられない状況に陥っている。

ようやく質問が中断しても、女子生徒はどれを先に答えばいいのか困惑していた。

田をキラキラ輝かせたワックスは、尚も答えを迫る体勢で彼女に迫っていく。

「よせよ。引いてるだろ」

その様子に我慢しきれなくなつた十一郎は、読んでいた推理小説の表紙でワックスの頭に突っ込んだ。反応は予想通りというか、頭を抱えながらぼやいている。

ようやく女子生徒は話を切り出す間を感じ取つたのか、一枚の紙を取り出ると、十一郎に差し出してきた。

紙には学年とクラス、氏名が書いてある。一番上の欄には『私はミステリー研究部に入部します』という宣言が書き込まれていた。正式な入部届けに間違いない。

「一のA……八木綾花さんか」

十一郎が確認したと同時に、綾花は「あのっ」と声を上げた。

「刑事ドラマが好きで、よく見るんですけど……その程度の知識では入部できないでしょうか？」

先程の言い争いを見ていたのだらう。自分も問題に答えなければ

いけないと思つていいのかもしれない。

部室の奥で裕貴が「いいんぢやない。女の子大歓迎だよ」と声を

上げた。

とはいへ、彼女の知識がどれほどのものなのか、十一朗は興味を持った。

「じゃあ、入部できるできないは別にして、問題に答えて……警察官の階級を下から順に言つてみて」

不意に綾花が真剣な表情になつた。

これは勘で答えられるような問題ではない。知識がなければ解けない問題だ。刑事ドラマが好き　　彼女の話が嘘か本当か、十一朗は試したつもりだった。

「巡查、巡查部長、警部補、警部、警視、警視正、警視長、警視監、警視総監、警察庁長官……です」

指折り数えるように綾花は答えていく。一つにつき答える間はあつたが、間違いはなかつた。それ以上に彼女の知識の高さに感心した。十一朗は更に綾花を試した。

「巡査長を入れなかつたみたいだけど、理由は？」

「えつと……階級じやなく職位だからです。確か階級としては巡査だと思つたので」

迷わずに答えた綾花を祝福するかのように、裕貴とワックスが拍手した。

一年生っぽい幼い笑みを浮かべた綾花が、顔を紅潮させながら「ありがとうございます」と頭を何度も下げる。

「完璧じやん、文句無し。あいつらと比べたら雲泥の差だつて。知識も外見も」

ワックスの褒め言葉に、もう一度、綾花は「ありがとうございます」と頭を下げた。

これだけの知識を見せつけられ、他の部員に歓迎されているのなら、認めないわけにはいかない。

「うん、合格。入部の手続きをとるよ。活動時間は放課後から……」

終了時間はまちまちだけど、始まつて一時間くらいかな。まあ、暗くなるまでは帰れるよ

「はい、よろしくお願ひします」

「むらが気持ち良くなるくらいの礼儀正しさを見せて、綾花は教室に戻つていつた。

曲がる途中の角で、もう一回振り返るとお辞儀をする。

その様子をワックスが、鼻の下を伸ばしながら眺めていた。

「可愛いなー。一年生にもあんな子いるのなあ……亭主を支えて、家事に努める大和撫子つて感じ？」

「亭主つて！ 話、飛躍しすぎだる。一年生だぞ」

ワックスの妄想癖に呆れながらも、十一朗は声を裏返して叫んでしまつた。どうやら恋人第一号に認定してしまつたらしい。

「放課後が楽しみだなあ……あのせ、ドラマティ。刑事部長の息子としての推理はどうよ？ あの子、彼氏いそう？ 僕と彼女は脈あり？」

もはや、今のワックスに突つ込みは意味をなさない。

十一朗は全員出たのを見て、部室の鍵を閉めると、「自分の未来は自分でプロジェクト書きしろよ」とだけ答えた。

2・事件発生

放課後　十一朗と裕貴が部室に入った時には、既にワックスの姿があつた。

いつもは散らかっているワックス専用の席が、今日は奇麗に片付けられている。

そして、隣の席も同じように片付けられ、どこから用意してきたのか『ハ木綾花』と書かれたネームプレートが置いてあつた。黒板には色とりどりのチョークで『新入部員、ハ木綾花ちゃん。大歓迎！』と書かれている。

こんなことを突っ込むのもなんだし……と思つた十一朗は、敢えて見ないふりをして席に座つた。

しかし、裕貴の方はといふと何か言いたそうに体を動かすと、突然、机を両手で思いつきり叩く。空気が震えるような轟音が室内に響き渡つた。

そんな裕貴の剣幕を見て、十一朗とワックスはそのままの体勢で凍りついてしまう。

はしゃぎすぎた……雷が落ちるに違いない。ワックスはそう感じて殴られるのを覚悟したのだろうか。既に目を閉じながら構えている。

ところが、

「ねえ、今日歓迎会やらない？　ハ木さん呼んで、近くの喫茶店でさ……当然、代金は私達もち！」

逆鱗に触れたどころか、妙な先輩ぶりを發揮させてしまつたらしい。

裕貴は興奮して、「我ながら、いいアイデア」と自分を称賛した。更に手を叩き合つて、意気投合する裕貴とワックスを見ながら、

十一朗は話を切り出した。

「まあ、案はいいだろうけど……一田田でそこまでの歓迎をされた

ら逆に困るんじゃないか？ 徐々に打ち解けあつてから、そこで歓迎会が普通だる？」

十一朗の冷静な判断に、裕貴は納得したよつに「そつかあ」と答え、ワックスはといふと、

「そうだよな。初めは友達から……そこから恋人つていうのが順序だよな」

と、再び理解不能な飛躍妄想癖を發揮した。

十一朗は呆れて、もう突っ込むのをやめた。新刊の推理小説を開いて読み始める。

そこに、軽快な足音が近づいてきて部室の前でとまつた。しかも、律儀に扉を一回叩く。

「開いてるよ」

新入生の登場にそわそわしているワックスを無視して、十一朗は声を上げた。

「失礼します」

言つて綾花は入ってきた。手にはノートと筆記用具、警察関連本を数冊持つている。

それを見た十一朗は、思わず笑つてしまつた。

「本当に警察関連のものが好きなんだな……」

「はい、東海林先輩が刑事部長さんの息子さんだなんて、私の憧れです」

意識しないで綾花は言つたのだろう。まず裕貴とワックスが息を呑んだ。続いて十一朗も動きをとめた。

十一朗は開いていた推理小説にしおりを入れて閉じると、綾花を見る。

「知つていたのか……」

押し殺したように呴いた言葉に、綾花が困惑した表情を見せた。

裕貴もワックスも、事の成り行きを見守っている。

刑事部長の息子　　十一朗は父のお蔭で得た、その肩書きを好んでいない。

だから、高校を卒業してからの進路は、大学で法律関係を学んだあとに決める。漠然としたかたちのまま担任に伝えていた。

それを裕貴は知っている。ワックスも知っている。

綾花が十一朗の触れてはいけない部分を、一突きしてしまったといつことも。

先程までの賑やかな部室が静寂に包まれ、時計の秒針の音だけが室内に響いた。

皆が話し出すタイミングを窺っている。その状態が居た堪れなくなって、逆に十一朗から話題を切り出した。

「そんなに警察関連が好きならさ……警視庁の見学ができるか、親父に聞いてみるよ

緊張で凍り付いた空気が一瞬にして、融解するかのように流れ去つていく。

ワックスが「どうしていいか、分かんかったよ」と安堵の息をついてからぼやいた。

まだ動けない綾花に裕貴が寄つて行くと、彼女が持つている警察関連本を開いて笑つた。

「見てプラマイ、すゞいよこの本。蛍光ペンで重要なところ印してある」

裕貴が開いて見せた本は、確かに数色の蛍光ペンで奇麗にチェックしてあった。ただ好きというだけではここまでしないだろう。

綾花もようやく安心したのか笑顔を見せて、また「ありがとうございます」と言った。

その時だ。綾花の携帯が鳴つた。面白いことに流れた着信メロディーは、最近視聴率が上位の刑事ドラマのオープニングだ。

「御免なさい。出ます」

皆の視線を気にしながら、綾花は携帯電話を取り出すと、相手に返事をした。

直後に、相手が何か話したのだろう。綾花の顔が一瞬で蒼白になつていった。

「えつ、警察？　はい……間違いないです。電車に？」

綾花は唇と声を震わせたかと思うと、電話を持つ気力すら失ったかのように視線を虚空に固定させたまま、その場に座り込んだ。誰が見ても正常な精神状態ではないと分かる。綾花の変わりよう、隣にいた裕貴が気を遣つて肩を抱いた。

電話を切つた後も、綾花は体を震わせたまま動けない。

「どうしたの？　私達にできることなら、何でも協力するから話して」

綾花の思考回路を混乱させないようじだりつ。裕貴は優しい口調で綾花に聞いていた。

「電車に飛び込み自殺したつて……」

綾花の衝撃の告白に、十一朗とワックスは顔を見合せた。

部活動の最中に、警察から伝えられた飛び込み自殺発生という驚きの報告

まるで部員全員の混乱を具現化するかのように、授業終了から一時間がたつたと知らせる鐘が、校舎内に喚声のよみに響き渡つていた。

3・謎の男

数刻経過しても、綾花の状態は変わらなかつた。

目の焦点は定まらず、言葉をかけても反応を示さない。肉体から魂が切り離されてしまつたのではないかと思えるほど、意識が閉ざされた状態になつていた。

「大丈夫？ 立てる？」

裕貴の声は聞こえたのだろう。顔を上げた綾花が自力で立ち上がるうとする。

しかし、彼女の意思を裏切つたように膝が折れた。裕貴が慌てて転倒しそうになつた綾花を補助する。

これでは次の行動に踏み出せない。

そう判断した十一朗は、買つたばかりの携帯電話を使って、タクシーを頼んだ。

深刻な状態の綾花を一人で行かせるわけにもいかないので、ミス研部員全員が同行する。

着いたタクシーに乗車しながら「明鏡止水総合病院へ」と十一朗が伝えると、タクシー運転手は目を細めた。

顔面蒼白の少女に付き添う高校生数人が総合病院へ頼まれたら誰でも、少女の身に不幸が起きたのだと感づくだろう。

運転手は重い空気を感じ取つたのか、一言も話しかけてはこなかつた。交わしたのは運賃を払つた時だけだ。

「ありがとうございました。お大事に……」

そんな運転手の言葉も綾花は聞こえていなかつただろう。車を降りた途端に倒れかけた。それを見た運転手が、慌てて車を降りて駆け寄つてくる。

「大丈夫ですか。途中まで肩をお貸ししましようか」

サービス精神に溢れた大人の対応だ。ありがたい言葉ではあつたが、裕貴が肩を貸したのを見て十一朗は断つた。

綾花を宥めながら裕貴は入口のほうに歩いて行く。その時、十一朗は視線の先に妙なのを見つけて立ち止まつた。

黒い車が一台停まつてゐる。妙だと感じたのは無線アンテナがあることだ。

覆面パトカーに違いない。しかも、内装をどこかで見たような気がする。気のせいかもしないと十一郎は思つて、裕貴の後に続いた。

十一郎の後にワックスがつくようなかたちで、ミス研一同は進む。受け付け前で裕貴が十一郎に目配せした。どこに運ばれたか聞いてくれということだろう。綾花に肩を貸した状態で聞けば、更に動搖してしまつかもしれないと感じての配慮だ。

十一郎はワックスと一緒に受け付けに近づいて、案内係に聞いた。「あの……先程、電車に轢かれたという男性が運ばれてきたはずなんですけど」

案内係の女性は一瞬、顔を強張らせた。無理もない。自殺しようとする者の関係者がきたとなれば、感情も表に出るだろう。

そう、ここは病院だ。誰もが怪我を治し、健康にならうと訪れる。命を断とした人間がくるのは、場違いとしか言いようがない。案内係はノートを出すとページを捲り、十一郎にペンを差し出した。

「関係者の方ですね。では、一応ここにサインを。場所は三階ですね」

綾花がサインできそうにないので、十一郎は自分の名前と全員の人数を書いた。

すぐに裕貴と綾花のところに行つて場所を伝える。エレベーターに乗つて三階に着くまで、誰も口を開かなかつた。

三階に到着した音をエレベーターが告げる。まず裕貴と綾花が先に降りて、十一郎、ワックスと続いた。

その時だ。右手側から「うおっ」という妙な声が上がつた。

声の根源に目を向けると、黒スーツ姿の男が一人立つていた。

十一郎も裕貴もワックスも知った顔だつた。警視庁捜査一課の刑事、貫野と文目だ。

彼らを見た瞬間、十一郎は頭を抱えた。貫野はといふと、苦虫を噛み潰したような顔をしてこちらを見ている。

思いがけない場の思いがけない再会に、貫野たちを知らない綾花だけが反応を示さない。

「ドラマチイ、私、先に八木さんを病室に連れていくね。だからここはお願ひ」

貫野と文目にお辞儀をしてから通り過ぎた裕貴は、綾花を連れて病室へと入つていった。

一呼吸時間を置いて貫野は深い息をつくと、十一郎に向かつて歩み寄ってきた。心境はかなり複雑そうで、頭を搔きながら口を開く。十一郎も同時に口を開いた。

「何でここに居るんだよ？」

同じ言葉が違う口から出て重なつた。貫野の部下の文目が目を細めて困惑の表情を浮かべた。

十一郎が貫野と文目と出会つたのは、公開自殺事件でだつた。犯人を突き止めるという互いの想いが一致し、行動を共にした仲である。

しかし、関係はどうと仲間どうよりも腐れ縁と喻えたほうが多い。

十一郎の推理力に貫野は競争心を持っているし、十一郎は貫野の口調が気に入らない。

協力して自殺屋を自首させた仲ではあるが、何故かまだギクシャクしていたりするのだ。

言葉が重なつたので、互いに相手の出方を窺う。すると貫野が先に口を開いた。

「藪から坊主が出やがつた……何だよ、お前ら。あの電話に出た子の関係者か何かか？」

綾花に電話連絡したのは、どうやら貫野だったようだ。

そういえば　と、十一郎は思い出す。病院の前に停めてあつた
覆面パトカーは他でもない。この二人組のものだ。内装を見た気が
したのも気のせいではなかつた。

「ミス研に今日入部した子、新入生だよ。名前はハ木綾花」
十一郎の説明を聞いた文目が手帳を取り出すと、メモを取り始め
た。理解できない行動に、十一郎は不快感を覚えた。
「何でメモ取るんだよ？　と、いうか何でここにあんたたちが居る
んだ？　自殺だろ？」

電車に飛び込んで自殺未遂　普通なら病室に刑事はいない。現
場検証や目撃者に事故当時の状況を聞いて終わりのはずだ。事情聴
取をするにしても自殺未遂した当人は意識がなく、とても話を聞け
る状態とは思えない。疑問が残つた。

十一郎の質問に、貫野が「答えねえわけにはいかないよな」と言
つて、文目を見る。

文目も「そうですね」と手帳を手にしたまま同意した。

「目が覚めて、逃げられでもしたら困るからな……俺達は張り込み
つてわけだ。同時に事情聴取して、自供させなきゃならねえ」
「自供つて？」

思わず十一郎は声を裏返して叫んだ。隣にいるワックスも状況を
呑み込めずに瞬きを、これでもかといふくらい繰り返している。

十一郎は息を呑んだ。貫野の一連の説明で、徐々に意味が理解で
きてきたからだ。

「何か、やつたのか？　あの人」

もはやそこに、安穏とした空氣は一片もない。張り詰めた空氣だけ
が存在する。

「ほんとにお前は憎たらしいガキのくせに、呑みこみが早くて楽だ
な……殺しだよ。奴の左後ろポケットから遺書が見つかっただ。『私
が殺しました。申し訳ありません。責任を取つて死にます』ってな。
相手の左後頭部を鉄パイプで殴つた後、鋭利な刃物で腹に一回、最
後に倒れこんだところでグサリだ……致命傷は最後の一突きで、傷

は心臓の大動脈にまで達していた。まつ、殺意は十分だし、それで観念して自殺決めこんだんだろ」

都合よく貴野は遺書を持っていたのか、証拠品袋に入った証拠を見せびらかすように十一郎に見せる。

確かに紙には貴野が言つた通り、『私が殺しました。申し訳ありません。責任を取つて死にます』と書いてあつた。遺書は書類のような紙ではなく、何かを切り取つたような粗末なものだ。しかも、奇麗に折り畳まれたというよりも、潰したような皺が残つていた。取り扱いは乱雑だったのではないだろうか

そして、右上の文字の一部が擦れて欠落していた。

身を乗り出すよつに見定めた十一郎を見て、貴野が慌てて遺書を懐に隠す。

「くつそ、この野郎。また変な癖見せやがつたな……もう何も教えてやんねー」

いい年した大人が絶対言わないような、子供じみた口調で言つ。十一郎は反応に構わず目を細めながら、遺書を入れた貴野の懐を見つめた。

「それって、本当に遺書？」

十一郎に問いかけに、貴野はあからさまに面倒臭そうな息をつくと睨みつけてきた。

「お前な。電車に飛びこむ瞬間を見た目撃者が、奴が何かをポケットに入れたと言つている。だから誰かが画策したとかはねーよ。真正銘の遺書だ」

「ふーん……」

はつきりしない十一郎に貴野は痺れを切らしたのか、落ち着きなく体を揺すつた。
そして、禁じ手と自分で踏んでいたはずであらう疑問を、十一郎にぶつけてくる。

「何か、引っかかるってんのか？ 聞いてやるから言つてみろ」

貴野の言葉を聞いて、後ろにいた文也が吹き出した。貴野は振り

返らずに、後ろ蹴りを文田に食らわせる。

「いや、どう考へても変でしょ……あと気になることがあるから確認しに行く」

十一郎は、貫野と文田がじゅれているのを無視して、病室の中に入った。

貫野と文田、ワックスも慌ててついてくる。何が『変』なのか知りたいようだ。

しばらく時間を置いたのが幸いしたのか、綾花は落ち着いていた。顔色は正常になっているが、まだ瞼は腫れていた。

十一郎は意識のない男の左側にしゃがみ込んだ。そして男の左手を取る。綾花と裕貴は十一郎が何をし始めたのかというように、不思議そうに見つめていた。

「やっぱりそうだ……貫野刑事、これが証拠。左手の小指に黒いインクが付いてる」

「証拠だあ？ 何の？」

貫野は十一郎と同じように、男の小指に付いている黒いインクを確認する。

が、意味は理解していないようで、頭を乱暴に搔きながら立ち上がりつた。

そんな貫野たちを促すように、十一郎は病室の外を指差す。

「じゃあ、説明するよ。取り敢えず病室から出て。それと文田刑事、さつきのメモの紙とペン貸して」

病室から出た十一郎は文田に手を出しながら頼んだ。刑事部長の息子という権限があるからか、貫野が睨みつけたからか、文田は手帳の紙を破るとペンと一緒に十一郎に渡す。

文田が手渡してきた物を受け取った十一郎は、憮然とした表情でいる貫野に差し出した。

「今から実践するよ。犯人は相手の左後頭部を鉄パイプで殴打……貫野刑事、犯人役を普通にやってみてよ。被害者の代理は文田さんに任せせるからさ」

十一郎の指示に貫野は「ああっ？」と声を荒らげた。すぐに舌を鳴らして反論する。

「なんで俺が……それにお前が言いたい」とは大体分かるよ。相手の左後頭部を殴打。つまり犯人は左利き。そう言いたいんだろう？さすがにこれは貫野も気づいたらしい。凶器が絡んだ殺傷事件が起きた場合、切りつけられた方向で犯人の利き腕を判断することが多い。それは基本といつてもいい。

犯人が右利きで正面から切りつけた場合は、傷は被害者から見て左上から右下の斜線状になる。左利きならその逆だ。それは棒を使っての攻撃も変わらない。

相手の背後から襲いかかり、左後頭部を殴打したのなら犯人は左利きだ。

「遺書を書いた時、インクは乾いていなかつたはずだ。証拠に遺書の文字が擦れていって、あの人の左小指に付いていた。つまり、その場で慌てて書いたってこと。相手を刺し殺して、すぐに遺書を書き、逃げきれないと踏んで電車に飛び込んだ……」

そこで十一郎は一段落おいた。一気に話すと整理できないだろうと思つたためだ。

「それで、文字が擦れていた遺書を見て、奴の手を確認しやがったのか」

貫野は先程の十一郎の行動を語ると、腹立たしそうに歯噛みした。「はい、犯人は左利き。その場で遺書を書きながら歩いてよ。あつちが踏切」

実践しろと言われた貫野は、その代理を無理やり文田に押しつけた。

変にプライドの高いこの男は、犯罪者であり自殺した男の真似を自分がするのが許せないらしい。

嫌そうな顔をする文田を相手に、貫野が「行け」と囁つように田配せで合図した。

「何で僕が……」文田はそう言いながら、渋々歩き始めた。犯人は

左利き 実践なので左手にペン、右手に紙切れを持ちながら、文
目は文字を書き込んでいく。

左利きではない文目は遺書を書くのに苦戦していたが、十一郎が踏切と指差した通路の突き当たり近くまで進むと、動きをとめた。書き終えたけど……というような素振りを見せて振り返る。

「書けたなら、前の話を踏まえて動いてみてよ。左小指に書いた遺書の右上のインクを付けて、遺書を握り潰してから、左後ろポケットに入れる」

十一郎の指示に貫野がまず気づいて「そうか」と叫んだ。文目もどうすればいいのか分からずに四苦八苦している。

そう、どう考へても左利きでは一連の作業がうまく出来ないのだ。ところが右利きなら、容易にこの作業を完了できる。

「奴は右利きか。で、殴った奴は左利き……どうなつてんだ?」

証拠はある。『私が殺しました。申し訳ありません。責任を取つて死にます』という遺書が ところが、遺書を書いた本人と相手を殴った者の利き腕が違つ。

「あーっ、くそっ。また搔き回してくれやがつて……どうやら高校生名探偵殿は、相当、俺達に仕事を『えたいらしいな』

自らの頭を乱暴に搔き回した貫野は、重い息をついた。手は煙草を探そうとしているが、ここは病院内だ。禁煙だと気づいたのか手を下ろした。

その時、病室から裕貴と綾花が出てきた。

先程見せていた動搖が嘘のように、綾花は落ち着いていた。自分で歩き、流していた涙も腫れていた瞼も感じさせないほど、冷淡な表情に変わっていた。

綾花の様子を見て十一郎は矛盾した印象を持つた。変わりすぎているのだ。天使が悪魔になつたのか、今鳴いたカラスがもう笑つたのか

貫野も不審感を抱いたのだろう。意識してなのか、真正面から話しかけるのではなく、綾花を横目で睨むように話し始めた。

「電車に飛び込み自殺して、大した怪我もなく生きているんなら奇跡だな。どうやら頭を打つて倒れこんだらしい……つまいこと線路の真ん中に倒れこんで、電車と地面の隙間に挟まれた。気絶したら助かつたようなもんだ。そこで変な動きをしたらお陀仏だつた」

言葉を選んで貴野は話したのだろうが、相変わらず口調は荒い。しかし、綾花は説明を真剣に聞いていないよう見えた。本題に入るつもりなのだろう。貴野が大きく息を吸う。

「で、隠す必要もないから、単刀直入に聞かせてもらう。奴の名前と住所を教えてくれ。身分証も持つてないし、前歴もないみたいで困つてんだよ」「

貴野の質問に綾花は顔を上げると、首を大きく横に振った。

「言えないつてのか？ 隠すと警察行くことになるぞ」

貴野の忠告に、また綾花は首を横に振る。そして、皆が耳を疑うことを告げた。

「知らないんです。私はあの人を知らない……一体、誰なんですか？」

全員が顔を見合わせた。

『私が殺しました。申し訳ありません。責任を取つて死にます』の遺書を残した謎の男。

そして、利き腕違いの謎

謎の男と接点がないはずの新入生ハ木綾花に伝えられた、自殺未遂事件

今回の事件も簡単には終わらない。

場にいる全員が難事件になると確信した中、文目が困つたような声を上げながら、掌に握っていた紙を後ろのポケットに押し込んだ。部下の妙な動きが気になつたのか、貴野が文目の腕をつかんで紙を取り出す。文目は変な抵抗をしたが、貴野の権力には及ばなかつた。

取り出された紙は、自殺未遂をした男の行動を実践した文目の遺書とされるものだ。

貫野は文目が書いた遺書を開いた。十一朗も気になつて覗きこむ。すると、そこには

『上司との付き合いで疲れました』という妙に現実的な内容が記されていた。

十一朗が、これ絶対に殴られるなど確信したと同時に、貫野の渾身の右手刀が文目の脳天に叩きこまれていた。

飛び込み自殺をした男を知らない。

綾花は質問とも思えるような発言を終えると、口元もつてしまつた。男の素性を本当に知らないのか。それとも隠したいだけなのか。その胸中は口を閉ざしている本人しか捉え切れないものであると同時に、追及して吐かせないことには分かり得ないものだ。

相手は高校一年生の女子。無理に聴取するのは、貴野も気が引けるのだろう。

貴野は手袋をはめた手で袋に入つた紙を慎重に取り出すと、綾花の前に突き出した。

「分かるか？」この紙には数字が書かれていた。これが電話番号だと気づいてかけたら、あんたの携帯に繋がつた。で、ここに呼び出したつてわけだ」

貴野の説明が終わるまで、綾花は視線を床に落とし続けていた。裕貴が促すように綾花の耳元で小さく囁く。

「大丈夫。信頼できる刑事さんだから、知つていることは全部教えてあげて」

横にいた十一朗には、はつきりと裕貴の声が聞き取れた。貴野には聞こえたのだろうか。何の反応も見せていないので聞こえていいのだろう。

しかし、優しく促されても綾花は首を横に振つた。

男を知らないというのは、事実なのかも知れない。

十一朗は確信した。これ以上聞いても彼女は何も話せないのだろう。

「分かった。じゃあ、もう何も聞かないよ」

十一朗の言葉を聞いて、貴野が「おいおい」と割り込んできた。

『また刑事面して、事件に首突つ込んでくれる気かよ……』それが貴野の言い分に違いない。

「知らないって言っているんだから、もう聞くなよ。時には紳士的に行動しないと、貫野刑事、いつまでたっても結婚できないぞ」

十一朗の戒めに貫野はこめかみを引き攣らせ、ほぼ同時に文田が腹を抱えて笑った。

静寂包む病院内なので、少しでも声が大きければ非常に目立つ。患者の検診時刻なのか、病室から出入りを繰り返していた看護師が、鬼の形相でこちらを睨みつけていた。

部下の失態で恥をかいだと、図星を刺されたのが相当気にくわなかつたのだろう。

貫野は積もり積もつた十一朗への怒りを発散させるかのように、文田の頭を手帳で叩く。

毎回、十一朗は感じている。父が刑事部長でなければ、とっくに貫野は暴行を仕掛けてきていて、裁判沙汰になつているだろうと顔を上げた綾花は貫野に目を向けると、冷静に思い出すかのように語り始めた。

「電話で内容を聞いた時には、母が飛び込み自殺をしたものだと思ったんです。だけど、寝ていたのは知らない男のかたで……」

納得しきれていなか貫野が妙な舌打ちをする。刑事というより悪人にしか見えない。

十一朗は相変わらずの、いい加減な判断と行動に呆れながら貫野を見た。

「どうせ電話で詳細語らなかつたんだろ。あんたの親が飛び込み自殺したつて、言つたんじゃないか？『あなたの携帯番号を持つていた男が、飛び込み自殺した』って言わなきやいけないのに」

しかし、貫野が綾花に伝えた内容も納得がいく。

男は身分証を所持してはいなかつた。それなのに、遺書以外に綾花の携帯電話の番号が書いてある紙を持っていたというのだ。二つを合わせて考えると、近親者であると思い込んで仕方がない。

しかも男は意識不明の重態だ。気を遣つて、詳細を語らなかつたとも言えるだろつ。

が、詳細を語らなかつたのは貫野の落ち度である。そのためには綾花はショックを受けて、言葉も話せない状況になつていていたのだ。

十一郎の言葉が図星であり、反省点もあるのだろう。貫野は一步引いて言葉にならない唸り声を出した。

すると、今度は逃げ場を失つたのか、十一郎たちミス研全員を追い払うかのような手の動きを見せる。

「あー、分かつた。全部信じたわけじゃないが、今回は放免だ。また事情聴取するかもしれないが、全ては他が繋がつてからだ。ほら、行け」

行けと言われても、十一郎たちが全面的にいじじりを聞く必要はない。

「裕貴、八木さんを送つてあげてくれ。俺はもう少し、ここに残る」十一郎の発言に、まずワックスが動搖した。自分はどちら側につけばいいのか、選択し兼ねているのだ。

迷つた拳句、不機嫌そうに睨みつける貫野と目が合い、ワックスは裕貴のほうについた。

「じゃあ、帰るね。貫野巡査部……じゃなかつた。警部補を困らせたら駄目だよ」

途中で失言したことに気づいた裕貴が慌てて訂正するが、完全に周りには聞こえている。

反射的にどうか貫野は、部下の文目に視線を向けて拳を握り締めた。また叩かれでは困ると、文目は笑いを堪えるのに必死になっている。

裕貴たちがエレベーターに乗つて姿が見えなくなるまで、十一郎と貫野、文目の三名は黙り続け、二階を示したランプが一階になつたところで、ようやく向き合つた。

まず、先制攻撃とばかりに十一郎は貫野に話しかけた。

「父さんに聞いたよ。貫野警部補、主任になれるかもしれないんだつて？ 何か、退職する人がいるから、棚ぼた昇格だつて……」

「棚ぼたつて言うな。努力の賜物だよ」

「ああ……貪欲の棚ものね」

「棚ものって。どこまで棚ぼたネタ引っぱるつもりだ！」

「Jの言葉の応酬戦に我慢仕切れなくなつた文目が、また吹き出した。『うやうや十一郎と貫野の漫才は、彼の笑いの壺に嵌まつてしまつたらしい。

また同じ看護師が違う部屋の患者の検診を終えて出でると、こちらを睨みつけてくる。

貫野は静かにしろというような素振りで、指を自分の脣に当てた。しかし、一番騒いでいたのは貫野だらう。十一郎は呆れて息をついた。

「あのや、意識不明の男の素性はわからないとしても、殺された男との接点はあつたはずだろ？ 殺されたのつて、どんな人だつたんだ？」

十一郎の質問に貫野は答えない。『うやうや黙秘を決め込んだ様子だ。

代わりに、文目が手帳を開いて説明を始めた。

「暴力団組員、升田龍治です。前科八犯。傷害、麻薬、賭博、偽造、銃刀法違反……何か、やつてない罪はないって感じですね」

文目が遠慮なしに語るのを見て、もう隠すのも疲れたといつように貫野が続けた。

「俺達一課だけじゃない。四課……今は組織犯罪対策部、主にマル暴を扱う課だが、そいつ等の中でも、知らない奴はいない有名人だつた。俺らは奴を綱渡りつて愛称で呼んだ」

マル暴は警察用語で暴力団を差す。昔は暴力団を取り扱う課は四課だったが、現在では組織犯罪を取り扱う課、組織犯罪対策部として動いている。

刑事部でいう捜査一課が証拠や証言を求めて駆け回る「マネズミ」と喻えるなら、組織犯罪対策部は威圧と頭脳で相手を恐れさせる大猩猩軍団といつてもいい。警察内部を知る者は、捜査一課より組織犯罪対策部の方がエリートという者も多いのだ。

そんな組織犯罪対策部と捜査一課全員が知るほどいの男だったのなら、遺体を見た瞬間に全員が「こいつは」と言つたに違いない。

十一郎は殺された男の素性を頭の中で整理すると、貫野に質問を続けた。

「綱渡り？」

「ああ、罪を犯しても殺人はしない。死刑や無期をかわしてギリギリの罪を重ね続けているから綱渡りだ。皮肉なことに今回は綱から落ちたんだろうが……俺も事情聴取をしたことがある。むかつく奴でな。取調室や法廷では、アホなくらい反省した態度見せるのに、シャバに出たら狂人になる。ま、怨む人物を数えたら星の数ほどのだろうな」

暴力団組員と一般人が何かしら争っていたとしたら、それは金銭が絡んでいたと考えたほうがいいだろ。多額の借金をした男が、金の返還を要求されて凶行に走る……一番、理にかなった動機だといえる。

「そこからあたつたら、あの謎の人の正体はわかるはずだろ？ 升田つて人、組にいたのなら顧客リストもあるんじやないか？」

十一郎の言葉に、貫野と文目が目を合わせて妙な顔をした。どうやら既に手は伸ばしているらしいが、何か様子がおかしい。

「奴、組を抜けていたんだよ。組の連中は抜けた奴の客なんか知らん。奴に貸した金がまだ残つている。奴の客知つてのなら教えてくれつて、逆に怒涛の応酬されでな。どうやら仲間には、纏まつた金が手に入るとは言つていたらしいが、客の名前は伝えていなかつたらしい」

一通り説明し終えた貫野が、威張り散らしたように仰け反つた姿勢を直すと、十一郎に迫つた。

「それよりも教える。あの一年生、出会い系サイトに手をつけたりしてないか？ どうも、知らないなんていう話は信用できねえ。男が女に金をつきこんでいた。その返金を迫られて、一人で升田を殺したという話になれば、全てが繋がる」

十一郎は、貫野の早急過ぎる推理に呆れた。

人を見たら疑え　それは刑事たちの中にある暗黙の了解でもある。だが、本当か嘘かを見極める眼力も必要だ。

出会い系サイトで知り合った意識不明の男を見て、高校一年生の女子があそこまで冷淡な態度で会話を続けられるのだろうか。

しかも、綾花が病室に入つた時には裕貴が肩を貸している。普段天然の裕貴も女性だ。女の勘が鋭くて驚くことも多い。綾花の微妙な変化を見逃すはずがないと感じた。

「それは絶対にないよ。それに頼むから、変な質問を彼女にしないでくれ。刑事ドラマが好きで、警察に憧れてるんだってさ。一人の刑事のせいで変な印象与えたくないだろ……それよりもすべきなのは、あの謎の人の素性捜査！」

十一郎の指示に、貫野はあからさまに面倒臭そうに顔をしかめた。「そんなとこ調べてたら、埒^{らち}があかねーよ。奴が目を覚ますのを待つたほうが早い」

貫野が言い切つたところで、エレベーターの到着音が響いた。見ると二人の若い刑事がこちらに来る。

「貫野さん。死んだ升田の所在地が分かりました。ただ、同居人がいるようです」

刑事の一人が貫野に耳打ちしたが、十一郎を見て口を開ざした。一般人を前に、情報を語つてはいけないという判断だらう。

しかし、説明した刑事の隣にいたもう一人が、十一郎の顔を見て会釈する。

面識のない刑事のはずだ。十一郎は不思議に思いつつも頭を下げた。

「東海林刑事部長の息子さんですよね……あの見識は、私も勉強させていただきました」

十一郎は思い出した。久保の事件の時にいた刑事だ。

十一郎と裕貴に『彼女の両親が君達に会いたいと言つてゐるから、現場に残つてくれ』と引き留めた人物。

それにも……と十一郎は思ひ。一見といつもの恐ろしい。
噂だけだと、喧嘩腰で入部させると書いてくるのに、事実を見ただけで大の大人が頭を下げてしまつ。

十一郎がただの部外者ではないと捉えてか、刑事は中断した話を語りはじめた。

「その同居人が俵井らしく……」こは張るので、貫野さんは現場に行つてくれませんか？」

刑事の言葉を聞いて、貫野が「俵井か……」と呟いた。

「あいつ家に居ねーだろ。朝から晚までお勤めだしな……ま、確かに俺なら奴が立ち寄りそな場所の見当はつくわ。なら、後はよろしく頼む」

その場を他の者達に引き取られて、貫野が歩き出した。文目も手帳をしまいながら追いかける。便乗するように十一郎も続いた。

「何でお前がついてくるんだよ。あつち行け、シッシッ！」

当然、貫野は十一郎がついてくるのを善しとしない。しかし、十一郎には秘策があった。

「あのさ、ちょっと気になることがあるんだ。殺害現場の血痕になん点とかなかつた？」

「ねえよ。それにそれは鑑識の仕事だ。お前しつつこいぞ。煙草と酒と刑事面は大人になつてからだ」

十一郎を撇こうと貫野は足早に歩いているが、先にあるのはエレベーターだ。待ち時間で簡単に追いつく。十一郎は追撃した。

「ないわけないだろ……何で探さないんだよ。それがあれば真相に近づけるかもしないのにさ」

貫野はエレベーターが到着音を鳴らして開いたといふのに、動きをとめて振り返った。

求めていた反応を見て、十一郎はしてやつたりと胸中でガツツボーズをする。

「よーし、分かった。どうしてもといつのなら聞いてやるから、言ってみる」

「俵井つて……どんな人？」

「言られて十一朗はわざと惚けた。貫野は歯噛みすると、こめかみに青筋を浮き出させる。

「一の野郎……神様が許さなくとも、世間さまが許すなら、俺はお前を殴つてる」

「そんなに怒らなくてもいいだろ。連れてくのはタダじゃんか。前に取引したし、それの延長線上だと思ってくれればいいからさ」「聞いた貫野が十一朗の胸倉を掴んで、エレベーターに乗せた。文目も後からついてきて、閉のボタンを押す。扉が閉まると、降下感と共に二階を通過する。

そこで貫野は煙草の箱を出しながら、口を開いた。

「お前は一度、親御さんに叱つてもらわなきや駄目だな……終わつたら、絶対に電話してやる。覚悟しとけよ」

遠回しではあるが、その応えは貫野が十一朗に同行を許したことを示していた。

「けどな、俵井も元暴力団組員だ。だから出しやばった真似はすんなよ。お前は社会科見学にきた高校生。いいな」

刑事部長の息子が、元暴力団組員に刺されたなどといつ一大事が起きたら、簡単に一刑事の首など飛びに決まつている。

それでも十一朗の同行を貫野が認めた理由は、前の事件の功績があるからに違いない。

エレベーターから降りて車に辿り着くと、文目が運転席、貫野が助手席に座つた。十一朗は自ら扉を開けて後部座席に座る。これが覆面パトカーでなかつたら、完全に十一朗は注目の的だ。

貫野が部下に耳打ちされた住所を文目に伝えると、車は静かに動き始めた。

外観では覆面パトカーとは誰も気づかないだらう。しかし車に入ると、世間と離れた別世界だ。時折、無線連絡の会話が入つてくる。貫野は我慢していた煙草を一本出すと、遠慮なしに吸い始めた。

密閉された車の中で、高校生がいるのに堂々と煙草を吸うのは、

刑事にしてみたらどうかと十一朗は思つ。まるで当たり前のよう、文田が運転しながら窓を開けた。

「後ろにガキが一人いるつてのが、落ち着かねえ……一人で乗せねえからな」

貫野のぼやきに、文田が微かに笑つて「普通なら護送ですからね」と答えた。

捕まえた犯人を乗せた時は逃げると困るので、当然、隣に刑事が一人つくことになる。後部座席に刑事でもない者が一人乗るなどと云ふことは、ほとんどといつていいほどない。

「俺は何度があるよ。けど、父さんの乗つてた車より、こっちのほうが席硬いかも」

さらりと言つた十一朗を相手に、ミラーに映つている貫野が目を細めた。

「悪かつたな……どーせ俺らはキャリア組じゃねーよ。ちゅつと待て、ここで停めろ」

目的地に着く途中で貫野が文田に指示した。困惑した表情で文田が車を停める。

「ここで待つてろ。この時間帯は、ここが一番出るんだ」

言つて貫野は車を降りると、視線の先にあるパチンコ店に入つていった。

貫野が言つた「朝から晩までお勤め」の意味は、どうやら俵井はパチンコ店の常連客ということらしい。

それにもと十一朗は思う。一番出ると分かっているのだから、貫野もここが常連なのかもしれない。

無言なのが気になつたのだろう。文田がちらりと十一朗を見た。

「先輩、暴力団組員の事情聴取もよくやつてるから、そっち系に顔がきくんですよ。イタチの貫野つて呼ばれているみたいですがね」「イタチつて……」

十一朗は座席に深く腰かけた。イタチは隠語で『素早い刑事（巡查）』の意味だ。階級を言われるのを嫌う貫野なので、その愛称は

きっと不本意に違いない。

その時、一人の男がパチンコ店から転ぶのではないかという勢いで飛び出してきた。直後に貫野が追いかけるように出てくる。

それを見て文田は降りようとしたが、十一郎を見た。いくら刑事部長の息子といつても、覆面パートナーに一人、置いておくわけにはいかないからだ。

「車出して！ 繁華街に逃げる気だ。行く手を車で塞ごう」

十一郎に言われた後の文田の行動は早かつた。アクセルとブレーキ、ハンドルを機械的に動かしてコーナーを曲げ、繁華街側に走らせる。この技術は貫野と常に行動することで叩き込まれた、彼の特殊能力なのだろう。

俵井と貫野は網のように入り組む小路に駆け込んでいた。

十一郎が窓を開けて二人の位置を確認しようとすると、貫野の怒鳴り声が聞こえてきた。こうなると、いつも煩い貫野の地声は役に立つ。

貫野の怒号を頼りに、十一郎は文田に車の向かう方角を指示した。追いかけられた時、人間は無意識のうちに逃げる方向を選択することが多い。左折する可能性が高いのだ。血液を循環する重い臓器、心臓が左寄りにあることと、軸足が左足であることが理由ではないかといわれている。

そんな計算された予測と追い詰めによって、一本の路地に車を駐車した途端に、俵井が突っ込んできた。慌てて逃げ場を探そうとしていたが、追いついた貫野が車の側面に叩きつける。

体がぶつかる鈍い音と共に、俵井が言葉にならない唸り声を上げた。相当の衝撃だったのだろう。苦痛で顔を歪ませながら、貫野に目を向けた。

「ちょっと、待てよ。まだ俺は何もしてねーよ」

逃げ切れない観念したのだろう。俵井は弁解始めた。俵井の腕をつかんだまま、貫野が睨みつける。

「じゃあ何で、俺の顔見て逃げやがった」

「あんた、俺の顔見たら、いつもおつかねえ顔して追いかけてくるじゃないか！ それ見て逃げない奴なんていねーよ」

貫野は「まあ、そりや否定できないわな」と言つて、俵井を放した。

しかし、ちゃんと逃げ道は塞いでいる。

「その様子じゃあ、何も知らないみたいだな。升田が死んだ。お前、何か知つてたら教える」

貫野は懐から煙草を取り出すと銜えた。対し、衝撃の事実を聞いた俵井は動搖する。

「死んだ？ 殺されたんっすか。誰に？」

貫野が吐き出した煙草の煙が、開けていた窓から車内に入り込んでくる。十一朗は煙たくて噎せてしまった。

現実を受けとめきれずに混乱している俵井に、貫野が自分の煙草を差し出す。

一本受け取った俵井の煙草に貫野が火を点ける。すると、ようやく一服して落ち着いたのか、静かに語り始めた。

「まいっただ……俺、あの人に五十万貸したままなんっすよ。組にも借りたまんまらしいし。今日纏めて返してくれる予定だったんですけどね。やっぱ、殺したのって寄つすか？」

自分が捕まらないと安心したのか、途端に流暢に語り出す。貫野は話を続けた。

「殺されたつて、悩む時間もなく言いやがったな。客の名前言つてなかつたか？ あと、幾ら返つてくるとかは？」

「名前は聞いてないつす。客の名前を聞かないのは俺らの中にある暗黙の了解つづーか、横取りがあるかもしれないから、話しませんつて。金は本当か嘘かよく知らないけど、七百万つて……他にも金かね蔓見つけたから、一億はぐだらないつて言つてました

「一億？」

俵井の言葉に、貫野だけでなく文田と十一朗も声を裏返して叫んだ。

一通り驚きの行動を見せた文田はハンドルを握りながら、もう片方の手で指折り数えている。自分の月給に換算すると何年分なのか、皮算用しているのだろう。

「ありえねーでしょ。だから、殺されたって思つたんっすよ……」

俵井は煙草を一気に吸うと、十一郎を見た。何でここに高校生が？　と、異物を見るような目だ。貫野が話を続けるというような素振りを見せると、俵井は煙を吐き出した。

「何年か前の貸しだとかで……どこまで本当か分かんないっすけどね。あの人、ホラも多かったから」

『縄渡り』死刑や無期をかわしてギリギリの罪を重ね続けている

『取調べ室』や法廷では、アホなくらい反省した態度見せるのに、シャバ出たら狂人になる』

その話が升田は生糸の『ホラ氣質』だと裏付けている。升田が得意気に話す中に、眞実など一欠片もなかつたのかもしない。

しかし、今回は本当だったのだろう。殺される　その動機は相当の代物だったに違いないのだ。

これから事件をどう掘り下げるか、思考を始めた貫野を見て十一郎は顔を出した。

「あのさ。升田の持ち物調べさせてもらつたら？　家宅捜索を……」「令状は？」

一即答したのは貫野ではなく俵井だった。その反応を見た貫野が、俵井の肩を抱くと不気味な笑みを浮かべて迫る。

「俺がまつとうな刑事じゃないってことは、もう理解してるよな？　訴えなら後で聞くわ。調べさせる。偽造カードか？　麻薬か？」

俵井は慌てて首を横に振つて否定した。墓穴を掘つたのだ。もはや言い逃れはできない。

貫野は携帯を取り出すと、連絡を始めた。家宅捜索のついでに俵井の隠し財産も見つけてしまおうという寸法だろう。

観念した俵井は、借りてきた猫のように大人しくなり、肩を竦めて縮こまっていた。

仲間を呼んで、ある程度の算段をつけた貫野は、後部座席にいる十一朗に視線を向けた。

「おい、高校生名探偵君。さつきの話の続きを聞かせてもいいぞ」

聞いてきた貫野に十一朗は迷わず答えた。

「じゃあ、事件現場へ

」

5・ゲソコン

十一郎が現場に着いた時には陽も落ちて、周囲は闇に包まれようとしていた。

暗くなつてしまえば捜索活動は難航する。今日の捜査はここまでと決めたのか、鑑識が撤収作業を始めているところだつた。

車から真っ先に降りた十一郎は、その場で一回転しながら辺りを観察した。

殺害現場の路地を出て左折すると、謎の男が自殺未遂した踏切が見える。距離は約百メートルといつたところだろうか。

刺した男の返り血を浴びたのだろう。謎の男が進んだ軌跡を示すように、赤い斑点が殺害現場と踏切を結んでいた。

十一郎は反転すると、現場に足を向けた。追うように降りてきた貴野が歩いてくる。

殺害現場で足をとめた十一郎は、その場にしゃがみ込んだ。死んだ男が残した血糊を、入念に観察する。

薄暗くなつてはいるが、路面に付着した夥しいまでの血痕は確認でき、事件の壮絶さを物語つていた。

十一郎の背後で貴野が「はあ」と疲れた声を出す。

「普通、高校生が死んだ奴の血糊を真剣に見るか？ ねーよ。もう、どうにかしてくれよ。こいつのこと」

貴野の悲鳴を横に、文目も苦笑いをする。その時、二人とは違う足音が近づいてきた。

十一郎が顔を上げると、そこには久保殺害現場で会つた鑑識の人が立つていた。

「十一郎君、何か疑問でも？ こっちに差し支えないことなら話すけど……」

鑑識員の意外な言葉に、貴野のほうが仰天した。「ちょっと待てと即座に割つて入る。

「高校生相手におかしいだろ。いくら刑事部長の息子でも、それは
駄目だ」

貫野の忠告に、鑑識員は間違つたことはしてないといひようこ、
逆に目を白黒させた。

「あれ、貫野さん、知らないんですか？ 五年前の話。刑事部長が
非番中に現行犯逮捕した男がいたじゃないですか。あれ、十一郎君
の助言があつたから出来たって話ですよ」

聞いた貫野と文田が同時に十一郎を見た。思わぬ話題の変換に十
一郎は頭を抱える。

「あれは、俺が偶然気づいたってだけで、父さんでも見たら分かつ
たつて……」

十一郎が中学入学を控えた頃だった。

小さくなつた学習机を買い替えようという話になつて、父と母と
共に家を出た。

目的の学習机も望み以上の素晴らしい物が見つかって、気持ち豊
かに駐車場に向かおうとした時だ。目の前の交差点で、幼女が車に
轢かれた。

頭から血を流し倒れ込んだまま微動だにしない。その場にいた誰
もが幼女は信号無視で飛び出して轢かれたと思っていた。

しかし、即座に十一郎は近くにいた男を指差して、父に指示を出
した。

「父さん、あいつが犯人だ。すぐに取り押さえて事情聴取して！」

突然出された息子の発言に戸惑つた父だったが、男と目があつた
途端、相手は逃げ出した。行き成り逃げ出した男を、疑わない刑事
はいない。

その場で男は取り押さえられ、あっけなく自分がやつたと自供し
た。

「十一郎、なぜ、あいつが犯人だと分かつたんだ？」

聞いた父に向かつて十一郎は、何の躊躇もなく言い切つた。

「だって、あの子の背中に足跡があるじゃないか。あの足跡、あの
ゲンコツ

靴のメーカーだよ。あの子の近くにいて、あの靴を履いていたのは、あいつだけだつたから」

男は信号待ちをする幼女の背後に立つと、車が来るのを見て蹴り飛ばしたのだ。幼女の背中にある足跡^{ゲソコブ}が、はっきりとそれを示していた。

しかし、実はその足跡^{ゲソコブ}はタイヤ跡と重なつていて、判別が難しかつたという。

翌日 新聞の地域欄に『小学校六年生の冷静な判断で、犯人が現行犯逮捕』という、恥ずかしいくらい大きな十一郎の[写真と記事が載つていた。

母は「この子は私の誇りです」と喜んだ。しかし、父は前までは「刑事を目指すといい」と言つていたのに、この一件以来、十一郎の将来について一切語らなくなつた。

父さんは俺と係るのが嫌になつたのかも知れない。十一郎はそう感じていた。

夢は刑事だつた。だけど、このまま父さんと話せないくらいだったら違う世界に

事実、十一郎が刑事に執着がないと知ると、父は障りなく話をするようになつた。将来は探偵と決めたのは、そんな裏の事情もあつたのだ。

十一郎の過去話を淡々と貫野や文田に話す鑑識員を横に、十一郎は路面を見つめた。

「鑑識さん、ちょっと疑問があるんだけど。自殺未遂をした人の着用物とか、見ることはできないかな?」

十一郎の要望に鑑識員は嫌そうな顔をするのではなく、逆に興奮したように鼻息を荒くし、着用物を映した写真を収めたファイルを持つてきた。

もはや、証拠大開放祭りだ。絶対に有り得ない状況に貫野が頭を抱えていた。

「これが着用物の写真ですね。実は僕にも疑問が……なので、僕の

推論と十一郎君の見解が同じか是非、お話を頂戴したい」

何が疑問点なのか、鑑識員は敢えて言わなかつた。貫野と文田も覗き込む。

十一郎は前に予測した通りの違和感を捉えて、鑑識員を見た。
「致命傷は最後の一突きで傷は心臓の大動脈に達していたんだよな。
それにしては浴びている血の量が少ない」

心臓は体内に血液を巡らすポンプだ。その心臓の中でも太い大動脈を貫けば、刃物を抜いた瞬間、夥しいまでの鮮血が飛び散る。見せてもらつた服の写真は、その血の跡がほとんど見当たらない。着用物に付着していなくても、路面には相当量の血の痕跡が残されるはずだ。それが現場にはない。

相当量の鮮血を浴びた者が存在する。そしてそれは、自殺未遂をした男ではない。

やはり被疑者とされる意識不明の男は主犯ではないのではないか。左利きの人物が主犯なのではないか。

「あと、ここに残つた血の跡つて、なんか変じやないか？」

十一郎が指差した場所を見た鑑識員が、「やはり、そこに目を付けられましたか」と口上の者に語るような丁寧な口調で返した。

関心を示した貫野と文田が血痕を真剣に見つめる。が、何が変なのか分からならしく、顔を上げると十一郎と鑑識員を見た。

「血糊を拭き取つたような跡があるだろ？ それとここにある円状の跡……これって、靴の跡じやないかな」

十一郎の説明に貫野が首を傾げる。しばらくして「そうか」と声を出した。

「ハイヒールの踵か^{かかと}」

言つて貫野は自問自答の決着を脳内でつけたのだろう。息を荒げると十一郎を見た。

「犯人は女ということだな」

立つたり座つたり忙しいなど感じながら、十一郎は首を縦に動かした。

十一朗は確証を得るために、更に事件の奥底に迫ろうと考えた。

「あと殺された男の[写真は?]

十一朗の質問に鑑識が答えるより早く、貫野は「その」とだけ
よ」と続けた。

「あの綾花つて子に升田の顔を知つてゐるか確認してほしいんだが、
これでもかつてくらい苦しんで死んだ顔しててよ。とてもじやない
が見せられねえ。だからお前も同じだ」

十一朗は貫野を見た。そしてまた呆れた。その反応に貫野が眉間に
皺を寄せる。

「俺、なんかおかしなこと言つたか？ なあ」

後ろにいる文田が首を横に振つて答えた。だが、その反応は間違
つている。

「今の発言、監察医の前で言わない方がいいよ。これは監察医も言
いたがらない知識なんだしさ。苦しんで死んでも安らかな顔にな
るんだよ。筋肉が弛緩するから……だけど唯一例外があつて、物凄
い形相のまま死ぬ時があるんだ。それが『激しい怒りの中』で死ん
だ時」

文田が感心して息をついた。貫野は虚空を見ると抑え込んだ気持ちを発散させるように叫んだ。

「かー……まじで、こいつどうにかしてくれ。高校生にここまで言
われたら、自分が馬鹿なんじゃないかつて思えてくる」

聞いた鑑識が高い声を上げた。しかし十一朗は推理が的中したこ
とで天狗になるよりも、貫野の言葉で現実を理解した。

父さんが俺と係るのが嫌になつた理由は、きっと。

あの日、男が犯人だと知つて推理を語つた時の周囲の田、父と母
の驚いた表情。あれは凄いという感服の目ではなく、近寄り難いと
いう畏縮だったのではないか。

そんなつもりはなかつた。言わなければ良かつたのか。息ができ
なくなるのではないかと錯覚するほど、胸が締めつけられた。苦し
みを耐え切れずに空を見上げた。

漆黒の闇の中に輝く星たちが語りかけてくる。

いつでも父の隣にいたいと考えてきた。優秀な刑事になりたいと背伸びをし続けた。

小学校低学年でありながらも、警察関連本に興味を示した。法医学、科学捜査、刑法……時を惜しんで読み漁り続けた。

そんな時に起こったあの事件

しかし、あの日から時はとまつたまま。自分の将来がつかめなくなってしまった。本当になりたいのは探偵なのだろうか。そんな疑問が浮かぶ時もある。

実際、現場にいられるのは探偵ではなく刑事だ。が、そこには十一郎の嫌う柵しがりみの世界がある。

近づいていた父との距離が、逆に一気に遠ざかつてしまつたという悲愴感。

空を見上げたまま十一郎は深呼吸した。だが、ここで立ち止まるわけにはいかない。

「本当に借金相手だけの関係だったのかな……何か違う気がする」

『激しい怒りの中で死んだ時』は憎惡のような感情が滲み出た時ではないだろうか。

殺された男と、どどめを刺した者の関係は、金の貸し借りでは收まらない親密な仲だったのではないか。

十一郎の中でいくつもの疑問が浮かんでは消える。難問に首をひねり続ける十一郎の横で貫野が唸つた。

「くそ、関係者が全員『口無し』じゃ話にならねえな

『口無し』　被害者は死亡、被疑者は意識不明、被疑者との関係が疑われるハ木綾花も事件との関連を否定。捜査本部が開設されいたら、『口無し殺人事件捜査本部』となつても不思議ではないだろう。

「貫野警部補。この事件、安易な気持ちで臨んだら迷子になると思うよ。多分、意識不明の男は覚醒しても真実を語らない」

貫野が、文目が、鑑識員が、十一郎を一斉に見た。貫野が息を呑

んだから、十一朗に向かつて聞いた。

「確証は？」

全員が十一郎の答えに注目する。満天の星空を眺めて精神統一した十一郎は答えた。

「刑事の息子の勘だよ」

両親が弁護士の貫野は妙な笑い声を出すと、懐を探つて煙草を取り出した。

が、現場保存を思い出したようで、大きな息をついてから隣にいる文目を殴りつける。

そんな二人を見ながら、きっと一人は何十年たっても変わらないんだろうなと考えて、十一郎は深い息を吐いてしまった。

翌朝六時　田覚まし時計で数分狂わずに起床した十一郎は、いつものように一家団欒の食卓についた。

しかし、今朝はいつもと様子が違っていた。寡黙な父が新聞を開くことなく、十一郎を見つめていた。

ふと、十一郎の記憶から貫野の言葉が引き出された。

『お前は一度、親御さんに叱つてもらわなきや駄目だな……終わつたら、絶対に電話してやる。覚悟しとけよ!』

忠告通りに連絡されたのだなと確信した。母も詳細を聞いたのだろう。席に着くことなく心配そうに事の進行を窺つていた。

「話は貫野に聞いた。また事件に首を突っ込んだそうだな……お前はまだ高校生だ。出しゃばった真似をするな」

父の叱責に十一郎は全身の血液が沸騰するような体温の上昇を感じた。

『出しゃばった』といつも言ひ方は癪に障つた。思わず身を乗り出して父に反論した。

「俺が進路の話を始めるといつも話題をそらすくせに、問題起こしあた時だけ口出しすんのかよ!　親父は俺の進路をどう思つてるんだ。あの日から何も聞いていないぞ!」

『お前は刑事に向いている』それが父の口癖だった。それなのに、あの日から『刑事』の文字すら父の口からは出ていない。

言い終わつてから十一郎は我に返つた。

面と向かつて父に『親父』と言つたのは初めてだった。封印してきた本音を正面から叩きつけたのも初めてだ。全てが初めて、づくし

……
様子を窺つていた母が包丁を手に、直立不動のまま立ち戻りしていた。

テレビに映つたニュースキャスターが淡々と雲の流れと降水確率

を説明する声だけが、キッチンに響く。普段、和気あいあいとした憩いの場に、呼吸困難になりそうな張り詰めた空間が形成された。

五年前を語らなかつたのは、父と母が決めていた暗黙の了解のようだつた。

十一郎だけが外れ者になつていたのだ。この状況を打破しなければ物事は解決しないと十一郎は考えた。

あの日よりも自分は成長している。だが、人生の岐路という進路の場に立つて悩み続けてきたのも事実だ。今は背中を押してくれる両親の一言が欲しかつた。

「コーヒーに砂糖は入れる？ グラーユー糖切らしちゃつたみたいなのよね」

胃が痛むような重い父と子の対立を前に、母が降参の白旗をあげて話題を逸らした。

しかし、十一郎は引いた架線を切り落とすつもりはなかつた。

「母さんはどう考へているんだよ？ 僕は大学に行くけど、その先は気にならないのか」

親としてどうなんだよという言葉は控えた。

母は父に返答を求めるように視線を動かすと、十一郎に詰めた弁当を差し出しながら答えた。

「誰かの指図を受けて決めるものじゃない。あなたの将来はあなたが決めるものでしょ」

大人が辿り着くであろう、尤もな結論を母は語つた。

十一郎が意識して控えた言葉。

親として……そう、自分は自分なのだ。将来を決めるのは親ではない。

父は母にも同意せず、我関せずと言つた様子で新聞を開いた。

それを見た十一郎は父の新聞を奪い取つた。母が両手で口を押さえて声を上げかける。

「俺が刑事になつたら、父さんはどう思つか聞いてんだよ。刑事部長の息子っていう肩書きを俺は嫌いだ。俺は俺だ。比べられる重圧

だつて知つてゐる。本当は――

俺の求める進路は探偵なんかじゃないんだ……言いかけて十一郎は口を閉ざした。父の背中を追い続けてきてはいたが、現場で働く父の姿を見たことはなかつた。

刑事の顔をした父を見たのは久保の事件が初めてだつた。現れた威厳溢れる父の姿に息を呑んだ。

それは一瞬の出来事だつたが、十一郎にとつては真剣に将来を考えさせられた瞬間となつたのだ。

十一郎が奪い取つて置いた新聞を丸めて手にした父は、カバンを取りつて立ち上がつた。

その丸められた新聞で十一郎は頭を叩かれた。思わぬ父の行動に驚いて顔を上げる。すると、あの日から忘れていた父の笑顔があつた。

「そうだな、お前はお前だよ。けれどこれだけは忘れるな。お前は俺の誇りある一人息子だ。それは何があつても変わらない」

聞いて胸が熱くなつた。父は自分を避けていたわけではない。認めていてくれたからこそ、静かに見守り続けていてくれたのだと分かつた。

安堵した母から手製の弁当を受け取つた父は、再び十一郎に視線を向けて言つた。

「親父と言われるのも、悪くないな」

父に声をかけようとした十一郎だつたが、紡いだ文字を脳内で変更した。

「親父！ 仕事、行つてらつしゃい」

右手を上げて玄関を出た父の姿は、久保の時に見た威厳溢れるものとは違うが、更に大きく見えた。

7・利き手

放課後、都立明鏡止水高等学校、ミステリー研究部の部室で「あんなことあつたんじやあ、今日は来ないかもしけないよな……」ひどく落胆したワックスが、得意の鉛筆回しを適当にこなしながら言つた。

裕貴も部室には來たが、色とりどりのチョークで書かれた『新入部員、ハ木綾花ちゃん。大歓迎』の文字を見ながら呆けている。十一朗は持つてきた推理小説を開きながら、綾花が持つてきた入部届けを見た。事件があつた直後のため、提出するかどうか悩んでいた。

「あれ？ プラマイ、今日は探偵小説じやないのかよ。警察小説なんて珍しくね？」

突然、ワックスが鉛筆回しをやめて、十一朗に話しかけてきた。推理小説に興味はないと思つていたが、十一朗が読む作品タイトルは気になつていたらしい。

「いや、読まないことはないよ。警察小説のほうが警察内情や専門知識が詳しく書いてあつたりするからさ。勉強にもなるし……」

「プラマイ、今朝、お父さんと喧嘩してなかつた？ 隣まで聞こえてたよ」

話の途中で裕貴がいらぬ質問をしてきた。聞いたワックスが変な笑みを浮かべる。

「まじで？ お前も親父と喧嘩する時あるんだ。意外な一面発見だな」

十一朗は息をついた。勝手に親子喧嘩であると結論づけられてしまっている。

「似て非なるものだよ。進路について話をしただけ。さすがに三年生になつたのに、大学に行つて勉強するつていう考えだけじゃいけない気がしてさ」

十一朗の答えを聞いた裕貴が、黒板に近づいてチョークを取ると笑いながら言つた。

「小説えたのは心境の変化からかー。お父さん喜んだんじやない？」

ワックスが十一朗を見た。幼馴染みだけに裕貴は全てわかつてしまつたようだ。それとも女の勘というものだろうか。この鋭さが推理に役立てばいいのにと十一朗は思う。

「喜んでいたのかな……よく分からないよ。親父つて、いつも口数少ないからさ」

「えー、プラマイのお父さんって寡默だからカッコいいんだよ。私のお父さんなんてお酒飲んだら弾丸トークとまんないんだもん。憧れのお父さんの姿だと思うけどな」

言いながら裕貴は立ち上がる、チョークを使って著作権侵害ともいえる、なんちゃつてキャラクターを描き始める。ところが、途中で描くのを断念すると制服の袖を見て声を上げた。

「あーもうー チョークで汚れちゃった。黒板に手を付けた私が悪いんだけどね……」

汚れた手をどうすればいいか、裕貴は室内を眺めてからティッシュ箱を取っていた。

十一朗は裕貴の一連の動きで、綾花の入部届けの『あること』に気がついた。

「八木は右利きか……左利きじゃないんだな」

貫野は殺人事件の共犯者を八木綾花と疑っている様子だった。しかし、共犯者は左利きだろうという推測が出ている。

そんな十一朗の呟きを聞いた裕貴が、首を傾げて近づいてきた。

「ねえ、何で八木さんが右利きだつて思うの？ 会つたばかりでよく知らないのに」

ワックスも「そうだよな」と言つて十一朗を見た。十一朗は綾花が渡した入部届けを机の上に置いて、文字を指差した。

書きと縦書きの用紙が一枚ずつあるんだ。こっちの横書きの文字は掠れてないのに、縦書きの文字は掠れているだろ？」

十一郎は手元にあつたノートを開くと文字を書いて実践した。

「手を付いて書くから先に書いた文字を擦っちゃうんだよな。横書きの時には右側に文字が存在しないから擦ることはないけど、縦書きだと右側に文字があるから擦ることになる」

裕貴が「あつ」と声を出した。

「さつきの私の落書きを見て気づいたの？ どういう思考転換でそうなるのよ」

十一郎は笑ってしまった。周囲の者の動きを見て引っかかった謎を解く。まるで推理小説の展開だ。

「裕貴の予測不能の動きに感謝だな。本当はハ木に直接聞いてもいいんだけど、聞くより自分で問題を解決したほうがいい」

ハ木綾花は嘘をついていない。確証を自分自身で持つことで十一郎は安堵した。

その時だ。ノックの音が一回響いた。

曇りガラスが張られた扉の向こうにある影は、紛れもなく新入部員ハ木綾花の姿だ。

「開いてるよ」

初日と変わらない入室の仕方で綾花は扉を開けて入ってきた。ワックスが感動したかのように目を閉じて全身を震わせているが、十一郎は無視した。

入室した綾花は視線を落したまま、顔を強張らせている。十一郎たちの一聲を待っているようだった。

十一郎は推理小説を閉じると、綾花を見た。視線が交錯して彼女が目を見開く。知りもしない男との関係を警察に迫られて、疑心暗鬼に陥っているのが見て取れた。

「じゃあ全員揃つたみたいだし、活動開始するか」

いつもと変わらない進行が意外だったのか、裕貴とワックスが驚いて十一郎を見る。

綾花も緊張で硬直させていた体を動かすと、十一朗に駆け寄ってきた。

「あの！ 昨日のこと、何も聞かないんですか？ それに私、あの後、東海林先輩が刑事さんと何を話したのか気になつて、ここに来たんです」

当然の反応だろう。十一朗は裕貴とワックスも見た。二人も興味深そうに身を乗り出している。本来なら捜査の進展を他者に語るべきではない。しかもハ木綾花は殺人の共犯者と疑われている人物だ。しかし、十一朗は自身で導き出した推理から、彼女は犯人ではないと確信していた。

「分かった……隠しても仕方ないから正直に話すよ。警察はハ木のことを殺人事件の共犯だと怪しんでいた。もしかしたら連行されるかもしれない。だけど、それは俺が全力で止めるよ。君は事件に関与していない。これは仲間意識からじゃない。確信だ。俺はハ木を信じているし、君に協力していくつもりだ」

緊張の糸が切れたかのように、ハ木綾花の表情が緩んでいく。

そして、涙ながらに訴えた。

「本当に私はあの男の人を知らないんです。信じてください！」

警察の前で叫んだら、逆に怪しまれるような主張だ。十一朗は綾花を見た。

「そう言われたら、警察はアリバイを聞く。俺は君を犯人だと疑つてはいけないけど、一応、確認していいかな。アリバイはある？」

綾花は首を横に振った。

事件発生は午後十一時、高校生が外出していたら確實に補導されてしまう時刻だ。家にいたというのが普通だろう。そして、アリバイは家族間では成立しない。刑事ドラマを見る綾花はそれを知っているに違いない。

「その時間は一人で自室にいました。だからテレビの内容しか言えないんです。母も仕事で留守でしたし……これってアリバイにはならないんですよね」

綾花の言つ通りだつた。残念ながらアリバイとしては不十分だ。

殺人を計画した者は、自分が被疑者とならない方法を模索する。

その中で捜査の対象からはずれる簡単な行動がアリバイ工作だ。

これを警察が警戒していないわけがない。刑事は誰であつても疑うこと前提に捜査に踏み切つてるので、完璧といえるアリバイしか信じない。

犯行時刻にどこかの防犯カメラに写つっていたとか、多人数の第三者と会話を交わしたというほどでなければ無理だ。

テレビの内容なんて録画すればいいわけだし、子供が殺人を犯したのなら親も隠そうとするだろう。

刑法一五条でも、親族間の特例として（犯人などをかくまい逃がす行為及び証拠隠滅）の罪は『犯人または逃走者の親族が犯人または逃走者の利益をのために犯したときには、その罪を免除することができる』とある。

刑事は当然、この刑法を知つてるので親の証言を信じないので。「事件の時間帯じゃなくてもいいんだ。事件現場と君の自宅は距離が離れているから、自宅周辺のアリバイなら十時半でも成立だ」

十一郎の質問に綾花は「あつ」と声を出した。何かを思い出したのは確実だつた。

「飲み物を買いにコンビニに行つたのを思い出しました。確かレシートが……あつた」

綾花がカバンから出したレシートに皆の視線が集まつた。レシートに打ち込まれた時刻は十時四十五分。綾花の自宅近くのコンビニの住所も記録されている。十一郎が指定したアリバイ成立の範囲内だ。

しかし、まだそれでは安心できない。レシートでもアリバイをつくろうと思えば出来る。誰かに頼めばいいことだからだ。頼みの綱はコンビニの防犯カメラが、綾花の顔をしっかりと捉えてくれているかということになる。

それでも十一郎は安堵の息をついた。綾花の性格は知つている。

嘘をつくわけがないと信じていた。そう、彼女は大切なミス研家族の一員だ。

「良かった。これでアリバイ成立だな。それは君から警察に渡したほうがいいよ。但し、アリバイがあるか追及されてからだ。こういうのもなんだけど、刑事と関係がある俺が助言したと思われるとまずいし、先にアリバイを言うと変な詐索されるのは確実だからさ」「事件発生の際には、第一目撃者を刑事は疑う。妙な言動を探るのは彼らの習性なのだ。

被疑者から、突っかかりのある説明を受けた時の警察の田は疑いしかない。

そんなことも十一朗は知っているので、敢えて綾花には言わない方がいいと告げた。

その時だ。裕貴が合わせた手の音が室内に響いた。

「ねえ、ハ木さんの歓迎会をしようと思つていいんだけど、都合の悪い日とかある?」

先走りすぎの裕貴の発言に十一朗は目を細めた。

事件のこともあつたばかりなので、綾花にしてみたら迷惑かもしれないだろうと思う。裕貴にしてみたら気分転換させるつもりで誘つたのだろうが、変に感じるのは女子と男子の考え方の違いから生じるものなのかもしれない。

しかし、裕貴の提案にワッキスも賛成のようで挙手した。

「俺、ここらへんで評判の店がないかつて聞いたんだ。で、見つけたのが二駅離れた、エナノスって店。スペイン料理店なんだけど、ガスパチョとパエリアがうまいらしくてさ」

聞いて十一朗は眉間に力を入れてしまった。事件現場の最寄り駅だからだ。

あれだけの事件だつたので、新聞でも大きな記事で載っていた。どの駅構内で男が轢かれたのか、どこで殺人事件が起きたのか地図まであつたのを記憶している。

エナノスという店は事件現場と降り口は逆だが、あまりいい店の

選択とはいえない。それでも、現場の悲惨さを知らない三人だから、互いに同意したようだつた。

「その駅なら、私の母が働いている店の最寄り駅です。仕事が終われば送ってくれるかも」

話の中で、綾花がさらりと口にした。聞いて十一郎は、思わず息を呑んでしまつた。

事件現場と綾花の母の勤務地が同じだとは予想していなかつた。そして謎の男が残していたという綾花の電話番号。

腕が震えた。安堵してからの疑惑発生で思考が破裂しそうになる。

十一郎は綾花を見た。

「ハ木、君のお母さんの利き手つて……左か？」

遠回しに聞くことが出来なかつた。確信に近い質問で綾花の目が見開かれる。

ワックスも裕貴も動きをとめて、唾を飲みこみながら綾花の答えを待つっていた。

「左です。もしかして、東海林先輩……」

『母を疑つているんですか』という続きの言葉を、綾花は押し殺したようだつた。少なくとも、彼女の中にも母が共犯ではないかとう疑いが生まれたはずだ。

それでも、何かが十一郎の中で引っかかるつてゐる。本能が叫んでいた。

この事件は何かが隠されている。推理を怠るな。米粒のように散らされた証拠を探せ。

十一郎は立ち上がつた。そうだ証拠だ。鑑識員が口にしていなかつた重要物が、現場に残されてゐるに違ひない。

「そうだ。『裏抜け』していた遺書だ……慌てて書いた遺書に、あんな筆記用具使うわけがない。現場に行かないと」

前に進んだ途端、足元に置いてあつたゴミ箱を蹴飛ばした。足元が見えていないほど混乱していた自分に十一郎は気づいた。

散らばつたゴミを掃くほうが早いと裕貴は判断したのだろう。掃

除用具入れからホウキを持つてくる。ワックスも近づくと、大きなゴミを拾つて、ゴミ箱の中に捨て始めた。

二人の動きを見ながら、十一朗は情けなくなつた。ミス研の部員は家族も同然と思っておきながら、事件の真相を語つていなし、繋がつた推理を教えてもいない。

一人で戦う自分がカツコいいと思つてしまつていた。しかし、それは信頼や協力という好意を無視した馬鹿な行いだ。外れた道を修正してくれる仲間がいるからこそ、都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部は成り立つている。

十一朗は反省した。自殺屋事件の時もそうだった。皆がいたことで事件は解決できたのだ。

「みんなに頼んでいいかな。事件現場に証拠が落ちているはずなんだ。鑑識課員はそれを見つけていない。捜査が難航しているのは、きっとそのせいだ。一緒に探してほしい」

見つけられないのは、その証拠が絶対にあるといつ考えに鑑識も至つていなからだろう。

「久しぶりに、ミス研始動だね」

ゴミを奇麗に掃き取つた裕貴が、十一朗を見てはじけるような笑顔を見せていた。

街並みを前景に、紅く染まつた夕陽が落ちていく。頭上では帰りの合図をするカラスの鳴き声が繰り返されていた。

十一郎が現場に訪れたのは昨日のことだ。今日は鑑識員の姿もなければ、刑事の姿もない。一般的の通行も現在は許可されている。

前日に見た殺人現場と踏切を繋ぐ赤い斑点は、視認できないほど薄くなっていた。

凄惨な現場だ。ミス研部員といつても血糊を見る行為は適切ではないし、良いこととはいえない。十一郎は安堵の息をついた。

謎の男は遺書を書きながら、現場から踏切に向かって歩いている。歩く途中で手にしていた紙を切り取り、ある筆記用具で書いたのだ。十一郎は男の遺書を、不用意に見てくれた貫野のお蔭で確認している。その遺書には特徴的な跡があった。それが『裏抜け』とう、インクが紙の裏に染み込んだ状態だ。

何を探せばいいのか、十一郎は話してはいない。裕貴たちは指示を待っていた。

「俺が立っているここから、踏切の手前の間に証拠が落ちているはずなんだ。それが男が遺書を書くために使った筆記用具……万年筆だ」

「万年筆？」

十一郎の言葉に敏感に反応したのは綾花だった。そう、ここではわずか数百メートルの間で書かれた遺書というのが、一つの謎となる。

裏抜けするような粗悪な紙に、万年筆という高級な筆記用具で書いたのは何故か？

あまりにも矛盾しているのだ。謎につまつた時、誰もが考える。男が持っていた筆記用具は、万年筆だけだったのではないか。万年筆は自分の所持品であったのか。計画的な犯行だったのか。

「ねえ、プラマイ。それって……」

次に問い合わせてきたのは裕貴だった。推理スピードは遅いほうだが、今日は冴えている。

「なんとなくわかつてきただろ。男は突発的に殺しをしている。それなのに遺書を書き、自殺未遂までした。誰かを庇っているのは確實なんだ。けど、そうなると疑問が残る。何故、犯行時に凶器を持っていたかということだ」

計画的犯行でなければ、凶器は手元にはないはずだ。だとしたら次に考えるのは、凶器を誰が持ってきたかということになる。

「凶器は共犯が用意した可能性が高い。主犯は意識不明の男じゃない。共犯者だ」

十一郎の推理に、綾花が唇を震わせていた。部室での会話を思い出したのかもしれない。『君のお母さんの利き手って……左か?』

という十一郎の問いを。

言いながら十一郎は唇を噛んだ。まだ決まったわけではないが、良い方に向かっている気がしない。

はじめは綾花の無実を証明するためだった。けれど今は

「探すぞ。万年筆! 僕とプラマイが右側探すから、三島とハ木は左側な」

重い空気を振り払うように、ワックスが率先して行動開始した。十一郎はミス研のムードメーカーともいえる、ワックスのそんな部分に助けられてきた。

もし自分の推理だけで暴走していたら、裕貴も呆れて離れているだろうと十一郎は思う。夢中になりすぎて、周りがよく見えていい瞬間があると自覚しているからだ。

そんな時にワックスは、必ずと言つていいほど修正の道を切り開いてくれる。

ワックスの言葉とともに、証拠探しが始まつた。鑑識員が見つけられなかつた物だ。簡単に発見できるとは思えない。側溝や植え込みの中も調べる。

十一郎は自殺未遂をした男が残していた軌跡を思い出しながら、証拠が落ちていそうな場所を見定めた。

植え込みに目標を決めてしゃがみこむ。中を覗いた途端に眩暈めまいがした。缶やコンビーパンの袋が大量に落ちていたのだ。

「ゴミと一緒にモラルまで捨ててしまつたのだろうか。十一郎は重い息をつきながら軍手を付けた。

こんなこともあるうかと用意して正解だつた。ボランティア用のゴミ袋も持参しているので、通行人からしてみれば証拠集めなどとは思われないだろう。

面倒臭いのでゴミを纏めてつかむ。すると右手に激痛が走つた。何かが突き刺さつたのだ。

「いつて！」

慌てて引っ込んだ軍手が黒く染まつていた。流出したインクに間違いない。

「ドラマチ、これ見つけたぜ！」

すると、隣にいたワックスが声を上げてからエンジの物を十一郎に見せた。万年筆のキャップに間違いない。十一郎もつかみ出したゴミを取り分ける。その中に万年筆の本体があつた。キャップが外れていたために、ペン先が突き刺さつたのだ。軍手を取ると血が滲んでいた。

「うわっ、最悪……」

それでも一回の手掴みで発見できたのは幸運だろう。暗くなると苦戦は確実だった。

「おーい、裕貴、八木、見つけたぞ」

十一郎の報告を聞いて、二人が駆け寄つてくる。

万年筆は土で汚れていたものの、原形はとどめていた。色は文物だ。汚れを軍手で拭き取ると、文字が刻印されているのに気づいた。『AYAKA・Y』と彫られている。謎の男と唯一繋がりのある綾花の名前だった。

「おいおい、まじかよ。警察に見つかるとまずかつたんじやないか。

危機一髪だな

文字を見たワックスが言うが、提出しないわけにはいかないだろう。

十一朗は持ってきた透明のビニール袋の中に、万年筆を慎重に入れた。

「気は進まないけど隠すわけにもいかないよ。証拠隠滅は刑法一〇四条。一年以下の懲役または二十万円以下の罰金。それにハ木にはアリバイがあるし、大丈夫だ」

ワックスは「でもなあ」と不安そうに肩を落としながら、覗きこんできた綾花を見た。

その時だ。

「おい、藪から坊主ども。何でここにいるんだ。捜したじゃねえか」怒号ともとれるような野太い声が響いた。十一朗は息をついた。もう振り返る氣にもならない。しかし、捜したとはどうこうことだらうか。背後にいるであろう貴野を見た。

「もう何も言う気にならないよ……捜したって？ なんで？」

十一朗の問いに貴野が、また遺書を取り出して見せた。どうやら警察も考えるところは同じらしい。後ろにいる文田は、ミス研部員と会つたのは当たり前というような顔をしている。

「遺書は包装紙だと分かった。調べたら筆記用具店の物でな……どうやら、プレゼント用の包装紙らしい。で、店員が程度覚えていて、顧客リストを調べたら」

言いながら貴野は、コピーした紙を取り出した。顧客リストの中に蛍光ペンで印が付けられている部分があった。客名は『ハ木和歌子』。

見た綾香の表情が歪んだ。十一朗も直感した。綾花の母の名に間違いないだろう。

用紙を入れた貴野は、一息つくと十一朗を見た。

「だから捜していただんだ。それに遺書の紙が包装紙と分かつた今、どこかに万年筆も落ちているはずだからな。買ったのは高級万年筆

の文物。名前が彫られた特注品で 」

「そつちの考え方次第では、協力するけれど、どうする？」

貫野の話が終わる前に、十一郎は話を切り出した。さすがに貫野も嫌な表情を見せた。裕貴とワックスも顔を見合せている。十一郎の手には貫野の言つた証拠があるからだ。

「この野郎、先回りしてやがったな。どうして、てめえは行く先々で……」

刑事の勘だらう。十一郎が何を隠しているのか気づいたらしく、通りの反応だ。

しかし、次に見せた貫野の行動は十一郎を驚かせた。親指を立てて駅前の喫茶店を指差す。来いという指示に違いなかつた。

「俺は人の手柄を取るガラじやねえからな……左利きの真犯人の情報てくれた借りは返してやる。他の奴らはどうする？」

聞いて十一郎は感づいた。警察はハ木の母親が左利きというのを知つたのだろう。共犯は綾花の母 その段階の捜査を開始したはずだ。

それにして、この気難しい男の変わりよは、どこから伝染したのだろうか。

十一郎の中でちょっとした推理が働いた。今朝のことかもしれないな。

「もしかして貫野警部補。親父に俺が捜査に足突つ込んだ話をしたのを、悪いと思っているわけ？」

十一郎の問いに、煙草をくわえようとしていた貫野が吹き出した。落ちかけた煙草を何とか空中で捉えて口にくわえる。

「馬鹿言つんじゃねえよ。子供の悪さを親に教えるのは、大人の常識だらうが！」

貫野の言動がおかしい。火を点けようとする両手が震えている。すると、

「先輩、捜査会議で左利きの真犯人がいるという話をしたんです。その後に刑事部長に十一郎君の手柄だつて伝えて」

文田が身を乗り出して語り出す。直後に貫野の首絞めが文田に決まった。

多分、こうなることを承知の上で、文田は言わなくていいことも語るのだろうなと十一朗は思う。そうでなければ、こんな暴力的な男と長く組んでなどいだらう。

しかし、父と貫野の間で、そんな会話が交わされていたというのは驚きだつた。事件に首を突っ込んで邪魔をしたという報告だけなら、父の口から「誇りある一人息子」という言葉は出なかつたのかもしれない。変な貫野の気遣いに笑つてしまつた。

煙草を吸いながら、貫野が歩き出した。後を見ると、裕貴とワッカスも付いて来ている。綾花も母のことが気になるのだろう。付いてきていた。

都内から離れた場所なので路上喫煙禁止区域ではないのだが、それでも歩き煙草はどうなのかと十一朗は思う。

「升田の件もあるし、話したいことは山積みだ。それとお前、進路変えたんだつて？」

不意に、振り返りもせずに貫野が聞いてくる。

父と進路の話をしたのは今朝だ。情報が流れるのがかなり早い。一課の警部補が、刑事部長とここまで親密に話をするのは稀ではないだろうか。

刑事部長でも人の親か。十一朗は父の裏の姿を垣間見ていた。
「俺、貫野さんと違つて最後まで反抗期続けるほど、気合いがない」というか、親不孝者じゃないといふか……」

「その減らず口、就職したら叩き直してやるから、楽しみにしどけ」「俺、国家公務員一種試験受けるつもりなんだけどさ。そうなると貫野さんを追い抜くのって簡単なんだよな」

貫野の後ろで文田が含み笑いを続いている。彼の階級は巡査なので、蚊帳かやの外だ。

喫茶店の扉は貫野の手で開かれた。大人数なので一番奥の席に通される。さすがに込み入った話なので、誰かに聞かれるわけにはい

かない。最適な場所だつた。

貫野にとつては灰皿があるのが一番の条件らしい。灰を叩き落してから、渡されたメニューを放り投げた。

「奢つてやる。夕飯いらないって親に電話しとけ」

喫茶店とはいってもグラタンやパスタのセットまである。十分に腹を満たせそうだ。

メニューを聞きに来た店員に、遠慮なしに皆が注文する。貫野は目を細めただけだが、十一朗は『これ、また親父に告げ口されるな』と思つた。

隣にいる文目に「お前は自分持ちな」と言つながら、貫野が十一朗を見た。

「まずモノを見せる。話はそれからだ」

言われて十一朗は拾つた万年筆を渡した。刻印を見た貫野は文目に手渡す。

綾香の名前の刻印がある万年筆だ。裕貴とワックス、綾香もやり取りを見ながら不安そうな顔をしていた。

「何で万年筆があるつてわかった?」

そして貫野は、誰もが思うであろう疑問を十一朗にぶつけた。

「万年筆で書いた特徴だよ。文字の強弱とか裏抜けとかさ。店でインクの出具合を確認したんだろうな。万年筆はインク注入しないと書けないからさ。これ俺が欲しくて母さんに頼んで、まだ駄目つて言られたメーカーなんだ。確か価格は一三万五千円だったかな。高いのはインクの流れや持ち手自体が違うから……俺、大学合格したら、絶対に買ってもらおう」

そこまでの価格になると大人の買い物である。しかも、高い万年筆は一生物だ。

他人が引くほど極めた十一朗の万年筆の真髓語りを聞いて、貫野は煙草を吸つてから続けた。

「取引返しに教えてやるよ。升田のアパートのことだ。家宅捜索したら偽ブランド品が大量に見つかっただ。密輸入品だ。他にも盗難さ

れた宝石類があつた

「俵井が動搖したのつて、それが理由だつたのか。八木、升田つて名前に心当たりはあるか?」

十一郎の問いかけに、綾花は首を横に振つた。意識不明の男といい、綾花は事件とは何の接点もない。やはり、綾花の母が何かを隠している気がしてならない。

運ばれてきたコーヒーに、何も入れずに飲んだ貫野が言った。

「升田は意識不明の男から七百万もらうつもりだつたんだろうな。そして、他の金蔓が密輸入品に絡んでいる可能性が高い」

皆が頼んだ料理が、場所が狭いと言いたげに次々と運ばれてくる。ちやつかりパスタセットを頼んでいる文也を見て、貫野はまた手帳で彼の頭を叩いた。

十一郎もカロリーで頭を回転させようと、運ばれてきたサラダにフォークを入れる。

「俵井は何年か前の貸しつて升田に聞いたつて言つたよな。七百万なんて大金、升田つて人が何年も徴収せずに黙つていたなんて思えないけど」

「そのことなんだが、升田はム所に入つていたんだ。だから徴収できなかつた」

「ム所? 何で?」

「詐欺事件起こしてな。そのあと、取り囮んだ刑事数人を大怪我させながら逃走した。奴の身柄を確保したのは、その事件が起きた二週間後だ。ム所に入つたのは八年」

一通り聞いて十一郎は納得した。刑期を終えて金がなくなつたので、金蔓に頼つたのだ。

「これで意識不明の男が身元を隠していた理由がわかつたか。七百万の徴収から逃げていたんだ。そして、升田と顔を合わせて争いになつたつてどこだろうな」

しかし、まだ引っかかる。この貫野の推理では共犯者の影が見えない。

「共犯者の動機は？」

十一郎の問いに、貴野が運ばれてきたサンドイッチのパセリを抜きながら舌打ちした。

「交際相手が金の徴収迫られてんだ。殺す動機は十分じゃねえか」「交際相手つて……決まつたわけでもないのに。それに入殺しつて、そんなに簡単にできるものかな？ 普通は恨みとかあるだろ？」

「今は人が死ぬのを見たかつた理由で殺す奴もいるし、普通の考えじゃ通用しないこともあるんだよ」

貴野は乱暴に二つのサンドイッチを潰すと、同時に口の中に入れた。刑事は早食いでなければ優秀ではないと聞いたことはあるが、目の前で実演されたのには驚いた。

「それと、あの子の母親を事情聴取することになる。勤務地もこの駅だし、事件があつた直前の時間に店を出ていることが分かっている。利き手も左だし、誰も疑わない。残念だがな」

最後の『残念だがな』に貴野の性格が聞いて取れた。刑事に存在してはいけない感情、私情

綾花の仲間である十一郎を前に思わず口に出したのだ。

しかし、謎が解けていない。それは凶器だ。十一郎は共犯が準備したと予想したが、その話だと辻褄が合わない。凶器を働き先に持つてくるなど、考えられるのだろうか。

十一郎はコンソメスープを飲んでから、貴野を見た。

「そういえば、凶器のこと聞いてないな。刃渡り何センチ？」

「高校生がそこまで聞くか？ バタフライナイフだ。洋画とかで筋肉質のおっさんが指先動かして牽制しながら、刃物出し入れするのを見せびらかす折り畳み式のあれだ」

最後の説明は完全にこちらを馬鹿にしている必要のない説明だ。こういった貴野の大人げないところを十一郎は好かない。

「ますます変じやないか。女性がそんなの持ち歩くものか？」

十一郎が聞いた瞬間だった。貴野の携帯が鳴った。着メロは何度か聞いているので、すぐに分かった。さすがに会話を聞かれるのは

抵抗があるのだろう。席を立つて外に出ようと動く。

ところが、貴野は眼を見開いた。店内に響く声で相手に興奮して聞き返した。

「それは本当か？ 間違いないんだろうな」

言つて十一郎に視線を向ける。複数回、応対を繰り返した貴野は外には出さずに、その場で話を終えると席に座った。

深く腰掛けて臉に手をあてたまま、「くつそ……」と続かない愚痴を言う。

どうにも話しかけづらじ雰囲気を見て、文田が息を吸い込んで貴野に聞いていた。

「あの先輩。電話の内容ってなんだつたんですか？」

ようやく貴野が仰け反つていていた体勢を整えてから、また十一郎を見た。

「認めたくないが、高校生名探偵殿の推理がどんぴしゃだよ。凶器は升田の持ち物だった。しかも鑑識が血液鑑定した結果、刺された順番がわかつた。意識不明の男が一番目、二番目が升田だ」

信じがたい情報だった。自殺未遂した男が先に刺されていたとはどうということなのか。

遺書の謎がますます深まる。そして、共犯だと思われる綾花の母と男の関係も

「どうしたことだよ、それ？ ますます意味がわからないじゃないか」

身を乗り出して聞いた十一郎を、コーヒーを飲んだ貴野が睨みつけた。

「そりや、二つとも同じだ。しかも奴を治療した執刀医、今頃になつて氣になつていることがあるつて、入電してきたらしい。男には刺された傷が三か所あつた。一つは今回のモノと思える刺し傷、残りの一つは古傷らしい。しかも、致命傷に近い傷だ」

謎が混在する事件は解決間近と思いきや、更に道を外れていた。

三人の口無したちが形成した鎖の絡み合い

「過去だ……口無したちが隠す時を遡らないと、この事件の真の解
決はない」

十一朗の中で推理という獣が再び吠えていた。

推理を怠るな。米粒のように散らされた証拠を探せと。

翌日　十一郎と裕貴は授業終了のチャイムと同時に教室を出て、競つようには帰宅した。

昼休みに部員全員で話し合い、今日の活動の場を図書館に変更したからだ。

自宅に荷物を置いてから、待ち合わせ場所の図書館で後から来るであろうワックスと綾花を待つ。

閉館時間直前にくる学生は珍しいのだろうか。白髪混じりの館長が笑顔を見せながら「こんにちは」と挨拶してきた。

じきにワックスや綾花も姿を見せるはずだ。十一郎は挨拶を返すと、館長を呼びとめて聞いた。

「あの……僕たち、昔の地元新聞が見たいんですけど、ここに十年前の記事つてありますか？」

ずれ落ちた眼鏡を人差し指で押し上げた館長が、感心したような声を出す。

十数年前の事件を探そうとしているとは思つてもいいだろ。郷土に关心を持つ若者が、まだ存在してくれていたのかという感慨に耽っている様子だ。

「あるよ。三階の閲覧室だ。とはいっても貸し出しあしていながね。なんなら出してあげるよ」

勘違いされているが断るのもどうだろうか。話を合わせていたら詳しく聞けることもあるかも知れない。十一郎は「お願ひします」と、取り敢えず頼んだ。

館長は「では、三階で待つていてよ」と言つと、階段を上がつていった。

十一郎と裕貴も続いて館内に入る。図書館内は本が放つ紙とインクの香りを充満させていた。

これにはリラックス効果があるといわれている。書物の多い場所

に行くと、急に催すという者が多いらしい。

ところが、そのリラックス効果が作用しなかつたのか裕貴は頬を膨らませていた。

「断ればいいのに。勘違いしてるよ。館長さん」

はつきりと理由を言えばいいのにという意味だろう。しかし、事件の記事を見せてくださいと言つてしまつと、更に勘織られてしまうとも考えられる。

十一郎は何となくの言い訳をすることにした。

「けど、あんな顔されたら遠慮しますとも言えないだろ。あ、ワックスたち来た」

十一郎は窓の外にワックスと綾花の姿を確認した。話題を切り替えるには丁度良いタイミングで助かった。大きく手を振ると、ワックスも気づいて手を上げる。

「ねえ、ああやつて見ると、ワックスとハ木さんってお似合いじゃない？」

突然、裕貴が思いがけない発言をした。女子にはそう見えるのか。無理あるんじゃないかと十一郎は目を細めてみる。逆立ちしたつてお似合いのカツプルには見えない。

「俺の目ではどう見たって、ヤンキーと大和撫子の和洋折衷にしか見えないんだけど」

「えー、ドラママイ見る田ない。容姿じゃなくて、雰囲気で想像してよ」

そんな話をされているとは知らないであろう、ワックスたちと館内で合流した。

「こいつて飲食厳禁なんだよな。俺、こいついた静かな場所は、昔から苦手なんだよな」

緊張気味のワックスが落ち着かない様子で館内を見回す。平日の午後なので人影もまばらだ。これなら集中して作業に打ち込めそうだ。十一郎は先頭に立つて三階へと向かった。

十一郎たちが図書館にきて求めた資料。それは、意識不明の男が

致命傷に近い傷を受けたであろう、事件の記事だった。

別れ際に貫野も、その点に着目するかと告げて帰つていった。

とはいっても警察も、殺された升田の周辺の捜査、謎の男の張り込み、綾花の母の事情聴取など、やりたいことは猫の手も借りたいほどあるはずだ。

三階に着くと館長の姿があつた。既に机の上に頬んだものが積み上げられている。地元新聞の縮刷版だ。思つた以上の量で、館長に出してもらえたことを感謝した。

「パソコンでも閲覧できるよ。尤もこの人数なら手分けするのだろうが。では、頑張つて」

館長は踵を返すと、館長室のある階に戻つていった。有り難く好意を受けて行動を開始する。

「見つけるのは傷害事件だ。探す年代は十数年前。被害者の名前は分からぬから、これかもしれないというものがあつたら、俺に教えてくれ。やるぞ！」

十一郎が分けた縮刷版を見て、ワックスが吐息の混じつた声を上げた。十数年前から、現在に至る記事は膨大だ。ネット小説を読み慣れていると思われるワックスだが、新聞記事と小説の文体は違う。空白もない黒に近い紙面を全て読めと言われたらと思うと、吐息を出すのも頷けた。

「全部読めと言つているわけじゃないんだ。傷害事件だったから、傷とかそういう文字を気にして抜き出してくれればいい。後は俺が選別するから」

十一郎が言い終わるより先に、裕貴と綾花は選別を始めていた。特に綾花は速読なのか、手の動きが早い。推理小説で鍛えてきた、十一郎でも負けてしまいそうだ。

もしかしたら、事件ルポ本を読むのも好きなのかもしれないな。

十一郎はそう感じた。

選別された資料が次々と十一郎の前に置かれていく。殺人、傷害、事故、強盗。

十数年前のほうが事件事故は少ないはずだが、いつも溢れ返ると犯罪はなくならないのかと憂鬱になつてくる。

作業をしながら流れ作業つて、こんな感じのかなとか思えてきた。いや、刑事になつても同じような地道な捜査をするのだろう。探偵になりたいと思っていた時は、また違う感覚が十一郎の中で芽生え始めていた。

その時だ。誰よりも早かつた綾花の手がとまつた。一枚の記事を見ながら震えている。ミス研の部室で見た、あの時を彷彿とさせるものだつた。

「嘘、そんなの聞いてない。そんなの知らない」

綾花は念佛のように言葉を繰り返していた。途端に顔面蒼白になつて噎せ始めた。慌てた裕貴が駆け寄る。十一郎は駆け寄る前に、綾花の異常原因を察知した。

「過呼吸だ！ 落ち着けハ木……俺の手が見えるか。俺の手の動きに合わせて呼吸をしろ」

おそらく、新聞記事から信じ難いものを発見してしまったのだろう。その為に、精神的に混乱して過換気症を引き起こしてしまったのだ。死に直結するような症状ではないが、最悪の場合、失神することもある。

十一郎は綾花の正面に座つて手を広げ、冷静に呼吸をすることを指示した。一酸化炭素の排出量を押さえるか、血中の一酸化炭素濃度を元に戻すのが有効な対処法とされているからだ。

拳を握り広げてを繰り返すうちに、綾花の呼吸は正常に戻り、顔色も少しづつ赤みがさしてきた。

「もう大丈夫そうだな。無理しなくともいいから、帰つて休んだほうがいいよ」

取り敢えずは安心だ と、十一郎が思った途端。綾花が突然、落涙しながら抱きついてきた。しかも異常の前と同じ言葉を何度も繰り返している。

十一郎は頭の中が真っ白になつてしまつた。一瞬、紅潮している

のではないかと考えた。そして、目の前にいる裕貴と目が合った。

すると、熱くなつた体が一気に冷却されていく。

「オッケー。よし、落ち着こう。とにかく全員席に戻つて……話はそれからだ」

皆に指示したものの、鼓動が静まらない。一番、落ち着いてないのは自分なのではないか。綾花の両肩をつかんで離した十一郎は、彼女を諭しながら席に着こうとした。

すると、綾花が十一郎の腕を取つた。離れないでということか困惑するしかない。

しかし、彼女の差し出したもう一方の手に、縮刷版があることに気づいた。

「その記事の中に、父の名前が……私、知らなかつた。ずっと」途切れ途切れで話す綾花の手から縮刷版を受け取つた。十一郎の目に記事の見出しが飛び込んできた。

『輸送車襲撃事件』

発生したのは十一年前、十一郎が小学一年生の時だ。縮刷版の内容は詳細ではないが、残つていたところを見ると、かなり凄惨な事件だつたのだろう。

『停車中に襲われた輸送員が一人死亡。一人重体。犯人は逃走中』と印刷されていた。それよりも目にとまつたのは死亡した人物の名前だつた。『ハ木彰夫』。

「まさかハ木……君のお父さんって」

十一郎が聞いても、綾花は答えられずに首を横に振るだけだつた。

『知らなかつた。ずっと』という彼女の言葉が全てを表していた。綾花はこの記事を見て初めて知つたのだ。父が死んだ本当の理由を

「君のお父さんが亡くなつていたなんて、初めて聞いたよ」

人には語りたくない過去がある。綾花もそうだつたのだろう。しかし、彼女は否定するかのように首を振つた。

「父が亡くなつたのは、私が小学生になる前です。父は深夜まで仕

事をしていましたから、思い出は悲しいことに少なく……それよりも、何で母が嘘をついていたのか

「嘘?」

「事故で死んだと聞きました。殺されたなんて一度も聞いていません」

「子供に話すのは迷いがあったのかもしない。多分、大人になってから本当のこと教えようとしたんだと思うよ」

女手一つで育ててくれた母がついた嘘 綾花にひとつでは、父の死の真相を知るよりも、そちらの方が重苦を伴う衝撃を受けたのだろう。

十一朗は記事の続きを読んだ。

『一人死亡。一人重体。犯人は逃走中』重体の男の氏名が載つていた。『和田繁樹』。

「和田って名前に心当たりは?」

これにも綾花は首を横に振った。彼女は何一つ事件の真実を知らない。

綾花に隠し通した母の嘘、十一年前の事件には何かが隠されている。和田繁樹という男の素性を調べる価値があるかもしれない。

十一朗は携帯を取り出した。事件の詳細を忘れないように、十一年前の記事の写真を撮った。そして、貫野に連絡してみることにする。

しかし、いくら待つても反応がなかった。出られないほど忙しいということなのだろうか。そもそも留守番電話サービスに繋がるかなと思った時、通話音が切れて貫野の声が響いた。

「誰かと思えば、お前か。ちょうど掛けようと思っていたところだ」お互いに都合がよかつたということか。それにしても受話器の向こうが騒がしい。一課にいるのだろうか。文田のちょっとした声が混在してきた。

「駄目ですよ。その登録名、見つかったら首切られますよ。バカ息子つて……」

十一朗は息をついてしまつた。前に裕貴が貫野を巡査部長と登録していたのだから、何となく予想はしていたが

十一朗も貫野警部補ではなく、登録名を変更しようと思つた。

「ちょうど掛けようとしたところって？　何か進展でもあったのか？」

質問に「またため口かよ」と貫野が愚痴る。もう耳にたこができるほど聞いた。今更だ。

「意識不明の男が覚醒した。あと、お前んとこの部員の母親が取調室で事情聴取を受けている。あとは升田の所持していた盗難品だ。宝石は転売する予定があつた。かなりの高額値の買い取りだ」

それは捜査一課も慌ただしくなるはずだ。通行不可だつた三本の道が同時に開通してしまつたのだから

「今はハ木にそのことは伝えない。いや、伝えられないよ。あと会えないか？　焙煎コーヒーの喫茶店、覚えてる？」

これに電話向こうの貫野は敏感に反応した。高い笑いを一声だけ出す。

「何か見つけたって感じだな。いいぞ、じつちもそれなりの土産話を用意してやる」

思いがけない貫野の言葉に、十一朗は耳を疑つた。変わつた。いつからだ。

そうだ。父に進路の話をした後からだ。父が裏で糸を引いているのかと考えたが、そんなことはないはずだと否定した。息子といつても一般人に話すなど有り得ない。では

「あのさ、貫野さん」

「積もる話は会つてからだ。切るぞ。携帯料金払つてんの、親父さんの給料からだろ」

聞く前に貫野は電話を切つた。変なところで気が利くのだなと十一朗は思つた。

裏で糸を引いているのは刑事部長の父ではない。おそらく、あつと

「裕貴、俺さ。進路変えてよかつたと思つよ。まだ、何となくだけど」

携帯をしまいながら裕貴に話しかける。しかし、なぜか睨みつけられた。意味が分からない。

そして、裕貴は黙々と出された記事を片付けていく。片付けをしているところを見ると、電話の会話から次の行き先を察したのだろう。

何とか機嫌が悪い理由を思い出そうとして、数刻前の映像が思い浮かんだ。

あれだ。綾花に抱きつかれた時の、裕貴の形相。

そして、ワックスが十一郎の肩を叩く。続けて耳元で囁いた。「なあ、彼女の胸当たんなかった？ どんな感触だったよ？」

「変なこと聞くなよ。あれは不可抗力」

「オッケーって、そういう意味じやなかつたのか？」

そういえば、そんなことを言つた気がする。動搖して適切ではない発言をしていたのだ。裕貴が怒るのも仕方ない気がする。

振り返ると裕貴はハ木の手を取つて歩きだしていった。綾花にだけ声を掛けて、自分とワックスには無言の態度を通しているのが怖い。それでも足は図書館を出て、焙煎コーヒー店に向かっていた。

「ちょ、待てつて裕貴」

慌てて十一郎は裕貴を追いかけた。幼馴染みだけに、怒らすと怖いことは重々承知している。とにかく、機嫌を直してもらわないとことにはかなわない。

追いついたと思った瞬間、裕貴が振り返つた。鬼のような形相は消えていた。

「私も大和撫子って言つてほしいんだけど」

思わぬ裕貴の願いに十一郎は睡然とするしかない。男として絶対服従なのは、どうなのだろうかと理性が叫んだ。

「馬鹿なこと言つてないで、喫茶店行くぞ」

無理やり裕貴の手を引く。そして、父の死の真相を聞いて落ち込

んでいる、綾花の手もつかんだ。

行き先は喫茶店 真実はきっと酷なものだらうが、目を閉じる
わけにもいかない。

「大丈夫。俺達ミス研はいつでもハ木の味方だし、みんな家族同然
ともいえる仲間だ」

追いかけてくるワツクスの声が、何となく哀愁を漂わせていた。

焙煎されたコーヒーの香りが鼻腔をくすぐるのは久しぶりだった。店の扉に取り付けられた、入店客を知らせる鈴の音も変わってはない。

十一郎たちミス研一同が注文する前に貴野は姿を見せた。後ろにいる文田は手帳を開いて思考中だ。

「コーヒーくれ」

前と同じように貴野は店員とすれ違いやまに注文した。文田も倣つて「僕も」と言つ。まるで数十年間通つてゐる常連客のようだ。店員は十一郎のところにも来て、注文を取つてから奥の方へ消えた。見届けた貴野は椅子を引くと深く座り、偉そうに体を仰け反らせた。

「さて、どこから話そつか。それとこいつは取引だつていうこと、わかつてゐるよな?」

何で立場が逆転しているのだろうかと十一郎は思つ。手元にあるのは重要証拠だ。貴野がどれほどの情報を手にしてきたのか知らないが、釣り合つような気がしない。

十一郎は先制攻撃を仕掛けようと考へて、綾花の働きで見つけることが出来た十一年前の事件を書き取つた紙を出した。

「その事件の『和田繁樹』って誰だか調べてほしいんだ。俺の推理が正しければ、意識不明の男の名前だ。それとハ木の父親がその事件で亡くなつてゐる」

貴野が慌てて紙をつかみ取つた。先制攻撃の衝撃はかなりのものだつたらしい。それでも、十一郎は満足せずに隣に座る綾花を見た。予期せずに知つてしまつた、父の死を引きずつてゐるのではないかと心配したのだ。

氣丈にも綾花は表情に出してはいなかつた。いや、それよりもと十一郎は思う。彼女を連れてきたのはよかつたのだろうか。綾花の

母が取り調べを受けている話題が出るのは確実だからだ。

「地元新聞の縮刷版か……考えたな。刑事でもここまで真剣に取り組む奴はあまりいないぞ」

貫野が珍しく褒めた。やはり進路を決めてから対応が変わつてゐる。まるで別人だ。

裕貴も貫野の性格を熟知しているので、目を丸くしてゐた。文目は更に驚いたのか口を開いたままだ。

貫野は妙な反応をしたままの文目に紙を渡すと、綾花を一瞥した。母親が事情聴取を受けていることを、話すか話さないか迷つてゐるのだ。代わつて十一朗は話を切り出した。

「犯人が逃走中つて書いてあるけど、その事件つて解決してないのか？」

「十一年前じやなあ……俺が刑事になつたばかりの頃か。よく覚えてないな。解決していないなら、特命が捜査しているはずだ」

特命 警視庁特命捜査対策室は、過去の重要未解決事件を継続的に捜査するチームである。

彼らが事件解決に努め、殺人事件などの凶悪事件の時効廃止が施行された今、強盗殺人犯の逃げ道はないといつてもいい。敢えていふなら『死』だけだろう。

貫野が覚えていないのなら、聞いても仕方がない。十一朗は貫野を再び見た。

「刑事になつたばかりの頃つて……貫野警部補つて何歳？ それで、未婚だろ」「未婚だろ」

「ちょっと黙れ。大人にはいろいろあるんだよ。それよりも覚醒した男は俺だけでやつたの一点張りだ。で、店の防犯カメラを見たら、万年筆を買いに来たのはその男だつた」

貫野の説明を聞いて十一朗は息を吐いた。やはり、推理通りだ。男は何も語ろうとはしないだろう。左利きの共犯を庇つてゐるのだ。

今のところ、左利きの共犯に近い存在は綾花の母だ。しかし、万年筆を買いに来たのが男なら、綾花の母が疑われる理由は、顧客リ

ストに名前が記載されていたからという理由しかない。

勝手に名前を借りたと男が言えばどうだろうか。一方的に想いを寄せていた。共犯などいないといえば……決定的な証拠はない。釈放は時間の問題だらう。

しかし、十一郎が渡した記事で謎の男が『和田繁樹』と判明したのなら、十一年前の事件で命を落とした綾花の父、そして妻である母との関係も繋がる。

皮肉なことだが、綾花は記事を見つけたために自分の母の首を絞めている。十一郎は事件が解決した瞬間、綾花との関係が壊れないだろうかと考え、息が詰まりそうだった。

それでも、十一年前の事件が始まりだというのなら調べるしかない。今は、彼女の母の無実を証明することが、ミス研の絆を守ることに繋がる。そう信じた。

「共犯は何て言つてる？」

十一郎は綾花の母の名前を出さずに聞いた。貫野も察したのか、「そうだな」と続けた。

「知りませんと言つたきり完全黙秘だ。家宅搜索つて話も出ているが、証拠が出てくるのかは疑問だな」

警察が求めている証拠は、返り血が付いた服や足跡ゲンコツを残したハイヒールだろう。それも廃却処分した可能性が高いと思われた。

「そつちも口無しか……それに謎が多くさげる」

十一郎はノートを取り出した。自殺屋事件でも活躍した物だ。事件内容を整理するように、十一年前の事件の概要をまず書き取った。「俺の推理を書くからよく見てくれよ。十一年前、輸送車襲撃事件が起きた。輸送員が一人死亡、一人重体、犯人は逃走中。死亡した輸送員は八木の父親だ。これは確かな情報だ。そして重体は自殺未遂した謎の男。これは俺の予想。執刀医が言つた、二か所の致命傷に近い傷は、この時に刺されたものだらうな……そして、逃走中の犯人は」

十一郎は手をとめて貫野を見た。そして犯人の名前を書いた『升ます

田龍治^{だりゅうじ}。

漠然とした推理だ。そのため、後ろに疑問符を付ける。

綾花の表情が変化した。十一年前に自分の父親を殺したとされる男の名前。知つた衝撃は計り知れないだろう。

部外者である文田も水を零しかけ、裕貴やワックスも落ち着くため水を同時に飲むほどだ。

貫野は目を見開いてから、その場にいる誰よりも多く水を飲んだ。「待て待て、行き成り何てこと書いてやがる。未解決事件だぞ。犯人特定するんじゃねえ。俺が特命に殺されちまつ」

貫野ほどの暴力気質の男が言つのだから、「冗談ではないのだろう。確かに十一年間も犯人を追いかけている特命に「犯人を見つけました」と言つたら、怒りの矛先を向けられるどころか突き刺されそうで怖い。

十一郎はそれでもかまわずに、ノートに推理を書き綴つていく。「そうでないと、三人の接点が見つからないんだよ。だつておかしいと思わないか？ 贊野さんは、升田は貸した七百万を謎の男から徴収しようとしたんだろうって言つたる。だけど話では、刺された順番は意識不明の男が一番田、一番田が升田だつて言つた」

「それがどうした？ 爭つてそつなつたんだろ」

「バタフライナイフは升田の所持品だろ。それ聞いて、変だと思わないか？」

十一郎は更にノートに書き込んでいく。もはや、文田や裕貴たちは傍聴人でしかない。ただ、息を呑んでノートを覗きこむだけだ。落ち着くためか、運ばれてきたコーヒーを貫野が飲んだ。

十一郎も運ばれてきた紅茶に砂糖を入れて混ぜる。回すスプーンとカップの当たる音が、周囲の客の声に混じつて溶け込んでいく。全員が話の続きを待つていた。

「七百万もの大金を貸した相手を殺そつとするかなつて思つたんだ。徵収するまでは絶対に殺そつとは思はないはずだろ。だとしたら、殺すそつとする理由があつたとしか思えない」

その理由が十一年前の輸送車襲撃事件ではないか。謎の男は升田が犯人だと知っていたのではないか。そこで話が拗れて言い争いとなり、お互いが予期せぬ結果が起きた。

升田が和田繁樹と思われる男に襲いかかり、刃物を奪い合つ格闘戦になつた。刺された和田を助けようとして左利きの犯人 今はハ木の母と推測されているが、彼女も争いに参加して升田を殴打。最終的に一人でどじめを刺したのではないか。

貫野が頭を乱暴に搔いた。この喫茶店は全席禁煙なので、喫煙で彼の苛立ちを紛らわせることは出来ない。

「十一年前の事件と今回の事件の繋がりか……やばいな、特命に喧嘩うことになりそうだ。嫌なんだよなあ。何やつていたんだつていう話にもなるし」

貫野のぼやきを聞いて、十一郎は笑つてしまつた。

普段、威張り散らしている貫野にも天敵がいるらしい。深く考えてしまえば、刑事部長の息子である自分も貫野の天敵なのだろうが。「特命に言わなくとも資料室に行けばいいだろ。事件が起きた日時も調べるものもわかつていて。この事件に他の刑事がノータッチなら、貫野さんが代表して調べろよ。主任目指しているんならさ」

「お前、馬鹿だろ。個人行動したほうが、出世に響くんだよ」

「俵井を追い詰めた時に言ったよな。『俺がまつとうな刑事じゃな』ってことは、もう理解してるよな』って。あれは飾りの言葉？ 俺はカツコいいと思つたけど」

褒められるなどということに無縁だったのか、貫野は視線を落として「ヒーヒーを飲んだ。相当、早く飲んだのだろう。カップを置いて大きな息を吐いた。

「和田繁樹って男と十一年前の事件の詳細でいいんだな。お前、就職して俺を追い抜いたとしても絶対に威張るんじゃねえぞ。これは取引というよりも貸しだ」

貫野は強引な将来設計案を申し出��いた。十一郎が就職して何年後になるのか、先は見えていないというのにだ。

貫野の隣で文田がメモを取り続いている。十一朗はメモを覗きこみながら言つた。

「あとで、男が意識を取り戻したのなら、質問してくれないか。電車に飛び込み自殺をしたのは、古傷と今回刺された傷を隠すための偽装だろ？」

さすがに連續で頼んだために、貫野が立ち上がった。いや、怒るというよりも表情には衝撃が浮かんでいる。文田も手をとめて聞いていた。

「あの飛び込み自殺って、そのためだったのか……そういうれば轢断死つて聞くな」

飛び込み自殺は悲惨としかいいようがない。隱語で『マグロ』と呼ばれるその死は、『ブツ切り』から取られているのだ。もし、その悲惨な状況になっていたら、男が刺されていたといふ事実は闇に消えていた。そう考へてもいいだろ？」

貫野は剃り残した顎のヒゲを触りながら、納得したように唸つた。「刺された傷を隠すには、飛び込み自殺が一番いい方法だったわけか。執刀医が遅れて入電してきた意味が、今わかつた。飛び込み時の傷と刺創の区別がつき難かつたんだな」

「今更？　とつくによんديいると思つていたよ」

たつた数百メートルの間で遺書を書く『私が殺しました。申し訳ありません。責任を取つて死にます』と。責任を取る自殺を決めた男が、人に迷惑をかける飛び込み自殺を選ぶだろうか。

そう感じた時点で十一朗は、何があるのではと考えていた。今は執刀医の入電で、ようやく男の自殺の動機が分かつたという感じだ。

「直接、十一年前の事件を聞いても、口は割らないと思つんだ。だけどそれなら、相手が違うといつても牽制することは出来る」

「お前さん、お得意の誘導尋問つてやつか」

「誘導尋問は俺じやなくて、貫野さんの仕事になるんだから、よく覚えておいてくれよ。そして、更に追及してくれ。刺された傷を隠

そうとしたのは、何故かつて

聞いて貴野は気づいた様子だった。その尋問が、左利きの人物を庇つていなかといふ質問に直結するものだということを。十一年

前の事件を掘り出す質問だということを。

「とんでもない爆弾だな。だが、奴は押し黙ると思うぞ」

「言つたる牽制だつて。男が左利きの真犯人を庇つてているとしたら、残された行動は一つになるんだ。自分が犯人だと認めなければ、左利きの犯人を守れなくなる。だから、十一年前のある事件も今回の事件の真相も自白せざるを得なくなるんだ」

「搖さぶりか……刑事部長が割らせの東海林と言われていたって話を思い出した」

言つてから貴野は場が悪そうにカップを取つた。しかし、中身は空だ。

「別に口じもらなくていいよ。親子だつて言いたいんだろ」

紅茶を一口した十一郎は貴野を見た。複雑な表情を少し覗かせた貴野は、誤魔化すように隣にいる文目のメモを覗きこんだ。

この貴野の行動の意味を十一郎は知つていて。貴野の両親は弁護士だ。刑事は犯人を追いつめる責務がある。弁護士は犯人を守る立場になる時がある。いわば犬猿の仲だ。

刑事部長の父を追いかけ始めた十一郎を前にして、何も感じていないはずがなかつた。親子という繋がりを強く意識しているに違ひなかつた。

同時にここに来る前の会話を思い出した。裏で糸を引いているのは父ではない。貴野なのだろう。

早く気づくべきだつたのだ。左利きの真犯人の案を出し、それが十一郎の手柄だと刑事部長の父に教えた。そう文目の口から聞いた時点です。

解決への道筋が見えたため、貴野が立ち上がつた。置いてある領収書を見ると、また合計金額より多い数の札を置いた。

「じゃあ、俺達は行くぞ。高校生名探偵殿のご依頼を果たさなけれ

ばなりませんので」

相変わらずの嫌味口調だが、十一朗は嫌な気分にはならなかつた。

それよりも

「あのさ、貴野さん」

十一朗の呼びかけに貴野が振り返つた。敬称を付けたことはあまりない。そのため困惑した表情だつた。

「協力に感謝」

敬礼して告げた十一朗に、貴野が吐き捨てるような声を出して返した。

「柄にもない」と言つんじゃねえよ。調子狂つじゃねえか!..」

出ていつた貴野の背中を見ながら十一朗は感じていた。

あの貴野相手なら、柵に縛られることがなく共に行動できそうだな

と。

翌日、都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部の部室では、部長席の周りに全員が集まるという情景が形成された。

事件の概要について十一郎がノートに記していく。複雑に絡まつた十一年前の事件と今回の事件との点と線、被害者、被疑者、重要な参考人の関係。

それは、ミステリー研究部部員には無視できないものになってしまった。

何故なら、今日来るはずの綾花が学校を休んだからだ。先日まで語り合っていた仲間は、自分たちが想像していた以上に人生最大の苦難に立たされていた。

まず動きを見せたのがワックスだった。得意のペン回しを数回だけすると、重い息をついてペンケースにしまった。

「一年の間で嫌な噂が広がってる。八木は殺人犯の娘だってさ」込み上げていた怒りを抑えきれずに、ワックスはペンケースを持った手を震わせていた。続いて裕貴も十一郎の顔色を窺うように上目遣いで続けた。

「あと……八木さんを入部させた理由は、事件の証拠をつかんで警察に褒賞をもらうためだろうって」

裕貴が途中で話題をとめたのは、噂を聞いたという生易しいものではないからだろう。きっとクラスの者に直接言われたのだ。

十一郎の知らない場所で、部員全員に精神的なダメージが与えられている。

何故、自分には言いに来ないのか

十一郎は歯噛みした。沸騰爆発しそうな感情は、頑丈な精神という箱に詰め込むしかないと分かっていた。それでも自分はまだ社会人ではない。大人からみると精神が未発達の子供だ。まだ箱の強度が足りなかつた。

二人の話を聞いて部室を飛び出した。廊下の窓を開けて、中庭で騒いでいる生徒たちに視線を向けた。誰が敵か味方か 疑心暗鬼になっていた。

「何も知らないくせに、騒ぎ立てて何が楽しいんだ！」

抑え込んでいた怒りを爆発させたところで、十一郎はワックスに羽交い締めにされた。

「ちよつ、落ち着けって。俺たちは大丈夫だからさ。また得意の推理で、他の奴らの鼻の穴開かせてやろうぜ！」

「ワックスの言う通りだよ。この前まではミス研に入部したくて来ていた奴らだよ。今は、推理！」

十一郎は部室に押し込まれながら、裕貴が言つたことに驚いた。『奴ら』女生徒の口から、裕貴の口から卑下の主語が出るとは思つてもいなかつたのだ。

自分よりも冷静に分析しているのは、この二人の方かもしれないと十一郎は感じた。

真実を説くことが先なのだ。それが学校を休むことしか出来なかつた綾花のためにもなる。今はそう信じて、ありつたけの推理力を発揮するしかない。

父の背中に追い付くために、そして事件の情報を語り、手を貸してくれる貫野の期待に応えるためにも

十一郎は事件概要をノートに書く前に空を見た。必死に事件を追つていたことで、自分が最も冷静に分析できる前段階の行動を忘れていた。

「男はハ木の携帯の電話番号が書かれていた紙を持っていた。これはハ木と男の接点がどこにあることを意味している。それはおそらく十一年前の事件だ。刺された順番は被疑者が先、そう考えると目的は金じやなくて脅しだ。そして升田が憤怒の表情で死に至つたことから、怨恨が裏にあつたと考えられる」

十一郎の話を聞きながら、裕貴は確認するかのようにノートを見た。

「ハ木さんのアリバイって、まだ貫野さんに聞かれていないよね？」「今日、ハ木が学校を休んだのは、噂から逃げる理由もあるんだろうけど、事情聴取されている可能性もあるな」

「貫野さんとか、お父さんからは何も聞いていないの？」

「いくら俺が刑事部長の息子でも、そこまで教える義務は二人にはないよ。それに貫野さんにも考えがあるんだと思う」

話が終わったところで、裕貴が妙な含み笑いを見せた。何となく理由は察した。貫野の言葉を借りるなら、敬称を付けるのは『柄にもない』ということだ。

「ハ木が事情聴取されていたとしても大丈夫。レシートがあれば、警察もコンビニの防犯カメラで確認してくれる。それでアリバイ成立だ。問題は被疑者が隠している真実とハ木の母親が黙っている理由だ。どちらかが落ちたら終わりだろうな」

これに裕貴とワックスが息を呑んだ。『落ちたら』それはどちらかが共犯の存在と十一年前の事件の謎を語ることになる。「なあ、ドラマチック。俺、心配で仕方がないんだ。主犯が協力者に口止めしておきながら、早々に自白して協力者に罪をかぶせたりとか……そんなことにならないか心配で」

「謎の男がハ木の母親に、罪をなすり付けるとか？　それは絶対にないよ」

十一朗はワックスの心配事を一蹴した。

自殺を決めた男が守ろうとした共犯者に罪をなすりつけるとは思えない。昨日の自分の推理にも自信があり、確信があった。その時だ。

「東海林さん」という声が聞こえた気がした。裕貴とワックスを見ても動きはない。

幻聴か。疲れが耳に出たらしいと思つて、十一朗は聞き流す。

「くそがきー」

すると、今度ははつきりと声が聞こえた。裕貴とワックスも顔上げて十一朗を見る。

廊下に駆け出して窓から校門の方に目をやると、貫野と文目の姿が校門近くにあった。どうやら初めの声は文目だつたらしい。一度目の貫野の叫びで気づいたわけだ。

周囲の生徒の視線が気にならないのか、文目が大きく手を振っている。本当に大人なのだろうか。恥ずかしいことこの上ない。

十一朗は思わず頭を抱えてしまった。裕貴はといふと応えるように手を振り返している。

「何で直接学校に来るんだよ。それに来たとしても呼び出すならメールだろ……裕貴、応えるのやめるつて。愛人と思われるぞ」

「それ、考えすぎじゃない？ それに応えないといつまでも大声出されちゃうよ」

もう一度、あの声で「くそがきー」と呼ばれたら堪らない。

慌てて十一朗は部室に戻ると、事件の概要を書き取っていたノートとペンを手にした。

「来なくていいよって言つても来るんだり？」

部室を出た瞬間に目が合つた裕貴とワックスに声を掛ける。二人は真剣な眼差しを向けたまま、返事は言葉ではなく首を縦に動かした。

ミス研部員全員の意思は一つだ。事件の真相が知りたい。綾花の母と綾花を救いたい。

ともに事件を経験して解決した仲間たち。ミス研部員は友達や仲間以上の存在なのだ。それは十一朗だけが思つていいことではない。裕貴もワックスも同じはずだった。

校舎別館の最上階にあるミス研の部室は、校内全体をみると校門に辿り着くまで時間が一番かかる場所といつていい。

貫野たちがいる校門に着くと、運動部数人が活動をとめて様子を窺う姿が見えた。

綾花が休み、そして中庭に向かつての十一朗の叫び。ミス研部は本日一番の注目株といつてもいいだろう。更に得体の知れない大人も追加だ。気にしない方がどうかしている。

大声で十一郎を呼んで注目させたのは貫野のはずなのに、まるで野生動物のような鋭い眼光を向けて運動部員を威嚇していた。

「どうして、学校に直接来るんだよ」

一人の予想外の行動に呆れてしまったのが先で、オブラーートに包んで言つことが出来なかつた。

十一郎の言葉を聞いた貫野が、大きな息をついてから煙草の箱を取り出す。

「俺の苦労も少しば察しろ。個人行動しているんだ。他の奴らに見つかるのが嫌なんだよ」

貫野が言う他の奴らとは特命のことだろう。未解決の殺人事件を取り扱う警視庁特命捜査対策室に配属されるメンバーは、その事件捜査をしていたメンバーやベテラン刑事で構成されている。

当然、捜査が継続されている事件を彼らは扱っていない。そんな未解決事件が現在の事件に直結してしまった可能性がある。

貫野の言葉には、ある意味も含まれていて、十一郎はすぐに読み切つた。

「その答えは、謎の男が十一年前の事件と関わりがあつたってことでいいんだな？」

「もう男じゃない。和田繁樹だ。十一年前の事件で重傷を負つた男。ハ木彰夫の仕事仲間であり、現場に落ちていた万年筆の顧客リスト名にあつた被疑者ハ木和歌子とも関係があると見ていい。互いに関係は否認しているけどな」

十一年前の事件と現在の事件の繋がりが見えてきた。そうなると次に注目すべき点は、十一郎が貫野に頼んだ和田繁樹への追及、誘導尋問の結果だ。

貫野は煙草に火を点けると、紫煙を弄ぶように途切れ途切れに吐き出した。

「お前の指示通りに和田繁樹を追及した。そつしたら、何て答えたと思う？ 一人でハ木和歌子を取り合つて、最終的に殺し合いに発展したんだそうだ。万年筆は彼女の娘の気を惹くためのもの。自殺

未遂をしたのは、見捨てられたからだそうだ

「だとしたら、何で飛び込み自殺を……」

これには裕貴が反応した。自殺と轢死を利用した古傷隠し。そうまでして隠そうとした理由は、複雑なものに違いない。

口無したちが隠し通す記憶。命懸けで守る男の何か

十一郎は自分より裕貴の方が、男が共犯を隠し通す理由を感じ取つているのかもしれないと思つた。

「十一年前の事件の話は追及した？」

「ああ、そんな事件もありましたねと言つた。まさか調べられるとは思つていなかつたんだろうな。ただそれつきり黙秘だ」

男は自分に不利な質問をされた時には黙秘しようと前以つて決めていたのだろう。取り調べをする際は、被疑者に冷静になる時間を与えないことが常識とされている。冷静になつた犯人は逃げ道を探す。刑事が次に何を聞いてくるのか、予想して計算づくの答えを何通りも脳内に用意する。

その時、刑事にできることは足を棒にしながら駆け回り、汗水垂らして拾い集めた証拠を叩きつけることくらいだ。

被疑者が絶対に逃げきれない証拠だけが、相手を追い詰める逮捕の鍵となる。

ところが今の状況は違う。和田繁樹は全面的に殺しを認めている。自分が主犯だ。共犯はいないと言い続けている。

相手は十一年前の傷隠しのために自殺未遂までする男だ。ボロを出すようなことはしないだろう。更に現在と過去が繋がる難しい状況。

十一郎はノートに聞いた内容を書き込みながら、貫野を見た。

「嫌な流れになつてきてるな……警察内部の動きつてどうなつているんだ？」

十一郎の功績を知つていてる貫野であつても、一般人に内部事情を話すのは迷いも生じるだろう。

しかし、十一郎は分かりながらも聞いた。嫌な予感が的中していく

るのではないか。その確認を取るために

「やっぱりお前は憎らしいガキだな……全でお見通しつて感じですよ。刑事部長も懸念していたな。捜査一課が扱う現在の事件と特命が扱う十一年前の事件、それと升田がいた暴力団を扱う組織犯罪対策部が扱う事件。はつきりいつて、今回の事件はこの繋がりが壁になっている」

貫野が吸いきつた煙草を落として踏み消す。
どうしようもできない苛立ちか　すると、文目がメモを開きながら呟いた。

「全員が全員別行動しているようなのですからね」

貫野が絶妙に隠していた警察内情の痛いところを、文目は氣にもせずに単刀直入に突いた。相棒の無神経な会話に、貫野はこめかみに青筋を立てながら、踏み消したタバコを拾つ。

「その別行動を俺たちもしているんだよ。警察庁は主犯逮捕で解決つて流れになつてきてんのに、十一年前の事件つて……板挟みみたいな捜査してよ」

貫野の愚痴を聞いて、十一朗はやはりと感じた。

証拠が見つからない事件となると、解決はお手上げ状態となる。主犯が全面的に罪を認めたというのなら尚更だ。

「俺が貫野さんに頼んでいる捜査内容は全部推理からだからね。そういう判断になるとは思つていたよ」

十一朗の言葉に文目が身を強張らせながら目を見開く。言つてはいけない引き金に手を掛けてしまつていたと気づいたらしい。弁解するかのように、体を乗り出して言つた。

「十一年前の事件を徹底的に捜査するのは大事なことだと思いますよ。暴力団の件も。僕は別行動を否定したわけではなくて……別行動も時には必要であるという話を」

「少し黙つてろ。今のは問題発言だ」

即座に貫野が文目の言い分を撤回させた。

貫野や文目といふと、刑事は縦社会であるということを忘れかけ

る。けれど実際は縦だけではなく横の関係も存在する。

貫野に頼んでも、もう捜査は続けてくれないだろうなと感じた。
事件は和田繁樹が犯人というかたちで、解決に向かっていくのだ
ろう。

十一郎も悩んでいた。十一年前の事件を掘り起こし、口無し事件の謎を追い続けてもいいものかと。

今の状態なら和田繁樹逮捕、共犯はないというかたちで終わる。
綾花の母が共犯とされることもなく、事件も幕を閉じることができ
る。

が 本当にそれでいいのか。真実から逃げて目をつぶる行為は、
刑事を目指す自分がしていいことなのか。ミス研部長の自分と刑事
部長の息子である自分が脳内で戦い、葛藤を繰り返す。

このままだと全てが点。十一年前の事件は語られず和田繁樹逮捕
というかたちで、真の解決を迎えない事件となってしまうだらう。
それでも

「こ」のまま、事件が解決したほうがいいのかもしれないな」
思わず口から出た言葉に、貫野と文田、裕貴とワッキスも十一郎
を見た。

瞬間、十一郎の胸倉に向かつて腕が突き出されてきた。乱暴につ
かまれて引き寄せられる。誰と言い代えることも出来ない貫野の手
だつた。

「俺を幻滅させんなよ。それでも刑事を目指す男か！」

一番に貫野が言い返してくるとは思わなかつた。

「のまま事件が解決したら、肩の荷が下りるのは貫野と文田のは
ずだ。

「ここに来た時は、最高の催し物を見たと俺は思つたぞ。それが今
度は逃げ腰か！」

貫野は十一郎が中庭に向かつて叫んだ姿を見たのだらう。催し物
という言い方がいかにも貫野らしい。

何故、メールで呼び出さなかつたのか。何となくその意味がわか

つた。

そして、貫野は高校生相手に自分が何を言っているかということ
ぐらい、分かつていいはずだ。責任を背負わせることも、捜査に協
力してもうひとつに限度があるということも。

いや　　と十一郎は考え直した。もう貫野は自分を高校生とは見
ていない。純粋に刑事を目指しはじめた仲間として認めてくれてい
る。

同時に刑事という立場を無視して、事件解決に協力してくれてい
ると気づいた。

貫野が十一郎の胸倉を離す瞬間を見計らったのか、裕貴が寄つて
きた。目を向けると、驚くほど真剣な裕貴の表情が飛び込んできた。
「私ね。昨日、ハ木さんの方が心配で電話を掛けたの。辛いよう
なら、もう何もしないでいいって。十一郎にも警察に任せようつて
言うからって。やつ電話したの。そしたら、ハ木さん、何て答え
たと思う?」

話しているうちに裕貴は涙目になってきていた。両手を強く握り
締めていた。

「お父さんが、どうして事件に巻き込まれたのか知りたいって言つ
たの!」

続けてワックスが発言したそうに拳手した。

「それなら、俺もハ木にメール送ったよ。お母さんに本当のことを
聞けばいいんじゃないかなって。そうしたら、聞きにくいくらい返つて
きた。今まで女手一つで育ててもらってきたんだもんな。だから親
にも遠慮するのかもと思つてさ。それ以上は言えなかつたんだ」

十一郎は裕貴とワックスの言葉で、頭を思いきり殴られたような
気がした。

一人が語ったセリフ『辛いよつなら、もう何もしないでいい』『
本当のことを聞けない』。

自分を偽つて我慢して、本当のことを親相手に言えなくて……父
に将来のことを語れずに悩み続けていた自分と同じだと感じた。

裕貴は感情を抑えきれなかつたのか、両目を手で拭つた。一直線に向けられてきた視線に、十一朗は思わず息を呑んだ。

「親子で隠し事つて辛いことだと思う。親子だからこそ、共有しなきやいけないこともあるでしょ。それは私たちミス研部も同じなんじやないかな。みんな家族同然ともいえる仲間だつて、プラマイも言つてくれたでしょ。だつたら、最後までハ木さんに協力してあげよつよ」「まひ

最初から最後まで綾花に優しい手を添えてきた裕貴は、感じたものがあつたのだろう。それぞれがそれぞれの役割を知らないうちに果たしていたのだ。

十一朗は推理力、裕貴は背を支える想いやり、ワックスはムードメーカー。

辛いことを経験して共有してきた仲間だからこそ、協力し助け合うことが出来る。

十一朗は空を見た。ミス研の部室から見える空は四角だ。外に出ても高層住宅が隠してしまつ都心の空は狭い。空氣も淀み澄んでいふことはいえない。

今では得意の推理力は空を見て冷静に判断していたからではなく、仲間が支えてくれて協力していくれたからだと思う。

同時に温かい視線や想いに囲まれてきたからだといふことも。

「そうだな……ハ木が知りたい過去を俺たちが見つけよう。事件がこれで終わつたら、誰も救われない」

不意に貫野が頭を驚掴みにしてきた。意味深な笑みを浮かべながら、目を合わせてくる。

「十一年前の輸送車襲撃事件を詳しく調べる。升田の件も含めて、和田の素性やその関係者もだ……そこに口無したちが隠す真実があるはずだからな」

自分が言おうとしたセリフを、先に貫野に言われて十一朗は息をついてしまつた。

すると貫野は話をそこで切つて手を離す。何故そんな行動を取つ

たのだろうか。次の瞬間、なるほどいつこうとかと合点がいった。

「別行動つてことか。そりいえば刑事の聞き込みよりも、世間話で流暢に語り始めるつて話を聞いたことがあるな」

それは前の事件でも感じたことだ。刑事に話しかけられて緊張していた者が、世間話で急に思い出して語り出すといふことはよくある。

「輸送車襲撃事件は、何度も聞き込みはしているはずだからな。お前には、そつちの関係者と世間話をしてきてほしいんだ。代わりに俺らは輸送車襲撃事件の関係者の素性調査をする。それで取引成立だ」

言つてきた貴野に皮肉で何か言ひこやうつかと、十一朗は一瞬思つたがやめた。

ここまできたのはミス研の仲間がいたからだけではない。貴野が父と何を話し、どんな想いで託してくれているかといふことも、進路のことも含めて、何となくわかつていた。

「取引というより借りを返すよ。夕飯ご馳走になつた借りをさ。あと、ハ木を気遣つて捜査を続けてくれてることも感謝してゐる。自分らじくないと感じながら言ひつと、貴野と文田が田を見開いていた。

気になつて裕貴とワックスを見ても同じ反応をしてくる。

それを見て、十一朗は息をついてから続けた。

「そのかわり貴野さんが主任になつたら、ちゃんとお返ししてくれよ」

これ幸いと裕貴とワックスが「お寿司」「焼き肉」と連呼する。どんなに緊迫した状況でも、ミス研部と自分は変わらないのかもなど十一朗は思った。

12・捨てるモノ、守るモノ

その後 貴野と交渉を成立させた十一郎たちミス研部の行動は早かつた。

別れ際に貴野から手渡された輸送会社の電話番号が書かれた紙、それを見ながら十一郎は番号を押していく。

相手を呼び出す「ホール音」が三回なつたところで、会社名を告げる女性の声がした。

丁寧な口調から電話接客専門の事務員なのだろうと十一郎は思つた。それでも相手に不快感を感じえないよう、十一年前の事件について語る。

事務員は十一年前という忘れかけた殺人事件をあげられて困惑した様子だった。

「少々お待ちください。責任者と代わりますので」
待ち受け音にする前に言った、事務員の声は震えていた。
無理もない。関係者の一人が死亡している凶悪事件だ。十一年経つた今でも鮮明に思い出すことだろう。

代わって出たのが中年男性と思われる太い声だった。名乗った苗字が会社名だったので、すぐに社長と分かった。

二度目の説明となつてしまつたが、断られるのを覚悟で十一年前の事件について語る。

事件の真相を聞いた仲間がショックを受けているということ。死んだ八木という男性が彼女の父親だということ。

十一郎の説明を聞いた社長は驚いた様子だったが、詳しく知りたいのならと了解してくれた。急な願いにも関わらず、今日会ってくれるとも約束してくれた。

輸送会社に向かう時間を使おつと、三人で歩きながら段取りを決める。

十一郎と裕貴の役割は、出来るだけ詳しく十一年前の事件を社長

から聞くこと。

更に就職活動と理由を付けて仕事内容も聞けるはずだと考へから、ワックスにはその役を頼んだ。

十一年前の事件の真相。そこに今回の事件との繋がりが隠されているはず

輸送会社に到着すると、会社の入口に立っている男性と目が合つた。作業服ではあるが社長に間違いない。まさか外で待っているとは思わなかつたので驚いた。

「君たちがハ木さんの親友かい？」

電話と同じ太い声、そして優しい口調だ。社長は電話でも、十一郎たちを気遣つてくれている様子だった。それが行動にも出ている。声も接客業特有のものだった。

十一郎たちは「はい」とだけ答えると、社長の次の言葉を待つた。「じゃあ、ここで話をするのもなんだし、応接室に行こうか」

社長の手でガラス張り手押しの扉が開けられる。後ろは十一郎、裕貴、ワックスの順で続いた。

来客受付を通り抜け、電話に出たであらう事務員の前を通過する。通りすがりざまに社長が、

「君、四人分のお茶を用意してくれ」と、事務員に頼んだ。

まるで重役が来たかのような親切対応である。本来なら急に話を聞きたいと言つた自分たちが、菓子折を持つてこなければいけないはずだ。

十一郎は申し訳ない気持ちになつてしまつた。とはいっても、後ろの一人は自然体なので、少し気分も紛れた。

応接室に入ると、一番先に目に飛び込んできたのは高級感のある革張りのソファー。次に社会に貢献したと書かれた賞状。仲間の結束を示しているかのような、社員旅行の写真も額に入れて飾つてあつた。

社員同士がぶつかり合つような空氣は感じない。居心地の良い空間がここにある。

学生の自分たちも快く受け入れてくれる、社長の優しさがあつてのものなのだろう。

「お茶は持つてくれるから、菓子はここにあつたかな……あ、遠慮せずに座つて」

社長に言われて十一朗は、学校の校長室にもないような高級ソファーに座つた。

次にノックがすると扉が開き、先ほど会つた事務員が茶を置いていってくれる。ほぼ同時に社長が戸棚から菓子を出した。渋い茶と相性がいい落雁らくがんだ。

いつもなら遠慮せずに菓子を食べるワックスも、今日ばかりは緊張した面持ちで金縛り状態になつていた。

「さてと、どこから話せばいいのかな……十一年前の事件を綾花ちゃんが知らないと聞いて驚いたよ。私が会つていた頃の綾花ちゃんは、まだこれくらいの大きさだったな。もう高校生か。そんなに経つんだなあ」

社長は記憶の中の綾花の身長を示すかのように手を水平に出す。そして息をつくと、茶を飲んだ。

倣うように十一朗と裕貴、ワックスも茶を飲む。香りがいい。味も舌に残るような渋さではなく、溶け込むような深みのある上品な味だ。高い茶を淹れてくれたんだなと十一朗は思つた。

「輸送車が襲撃されたと聞きました。ハ木のお父さんが命を落とし、同乗していた男性も重傷を負つたと……事件の犯人はまだ捕まつていないんですね」

十一朗の質問に、社長は首を縦に振つて答えた。社員の写真を額にまで入れて飾つている社長だ。事件発生の概要を聞いた衝撃はかなりのものだつたであろうと想像できた。

「貴重品を運ぶ輸送車は襲われやすいからね。安全対策は万全のはずだつた。けれど車載カメラは、どういうわけか壊れていたんだ。出る直前のチェックでは壊れていなかつたんだけどね。だから犯人の顔もわからないままだ。今思うとそれだけが悔やまれるよ」

愛していた者の死、そして犯人逃走中。遺族にとつてこれほど辛い仕打ちはないだろう。十一年もの間、ハ木の母は娘に語らず胸中に納め続けていたのだ。

何故、車載カメラが壊れていたのか。社長も長い時間事情聴取されたに違いない。殺人事件は関係者全員を不幸にする。考えるだけで胸が痛んだ。

「物がなくなるのはまだいいんだよ。だけど人の命はね……ハ木くんは奥さんと子供の写真をよく見せてくれたな。償いにはならないだろうけど、おりた保険から奥さんに渡したんだ」

それを言つた後、社長は「あつ」と声を上げた。何か思い出した様子だ。

「そういえば、和田さんにも子供がいたはずだ。同じくらいの年で、確か病気だつて言つてたな。治療費が掛かるから、出来るだけ残業させてくださいつて頼まれたっけ」

和田繁樹のことだが社長の口から出た。声を出したことから警察には話していない内容だらう。世間話から出た記憶の断片。これは大きな収穫のような気がした。

「和田さんにも保険金の一部を？」

「ああ、渡したよ。治療費に役立ててくれつて言つてね。けれどいい顔はしなかつたな。当たり前か、目の前で親友のハ木くんが殺されたのだから……」

「失礼だと思いますが、和田さんに渡した金額を教えていただけないですか」

「一千四百万だと思うよ。重傷だつたし、子供の治療費にとつてね。小切手を見て驚いていたな。こんな大金をと返されそうになつたが、では子供の病気が治つたら返金してくれよと言つて押し返したんだ」

十一朗が渡した金額を聞いたのには訳があつた。そして推理の中の金額が一致した。

升田が言つていたという十一年前の借り『七百万円』。升田と和

田で分け合つとその金額になる。

社長は更に続けた。

「けれど、直後に彼とは音信不通になつてしまつたんだ」

貴野の予想が当たつてゐる気がした。升田は和田から金を受け取るつもりだった。しかし、途中で気が変わつて逃げたのだ。妻も子も全てを捨てて

これが命懸けで共犯を守る男のしたことなのだろうか。和田の裏の顔に疑問が残るとともに、憤りを感じた。

掘り起こした十一年前の事件の時間が止まる。それを見て、ワックスが身を乗り出した。

「輸送と聞きましたけど何を運んでいるんですか？ 飾られている写真を見ても、社の雰囲気は凄くよさそうだし、詳しく聞きたいんですけど」

ワックスに褒められて社長は気分をよくしたのか、急に笑顔になつた。

好きで仕事をやつている人なのだろうなと想像がつく。立てかけてある写真には、先代社長の名前もあつた。一代目、二代目の苗字が同じところを見ると、父が建てた会社を継いだのだろう。

「むかしは引つ越し作業とかもやつていたんだよ。今は企業から任された荷物を運ぶのが主な仕事になつたね。会社を設立したのは私の父だつたんだけど、引つ越しで荷物を頼んだ時に骨董品を割られてしまつたらしいんだ。乱暴な扱い方が許せなかつたみたいでね。だつたら私がという気持ちで始めたらしい」

確かに証明するように賞状が飾られている。仕事への拘りと情熱がなければここまで語ることも出来ないだろ？。

居場所を正して更に十一年前の事件を聞こうとする。すると壁に通関士の資格を証明する証書が飾つてあるのが見えた。名前を見るにと壁に掛けられた社長の名前と同じだ。

「通関士の資格も持つてゐるんですか？」

十一朗の質問に社長は「ああ」と答えた。その顔は真剣な表情に

変わっていた。

「仕事を多くするには策略も必要ってことだよ。ただの引っ越し業務だけじゃ成り立たない時もある。不景気の時にはそれがモノをいう。父が建てた会社だし、潰したくはない。私の居場所であり誇りでもあるのがこの会社だからね」

十一郎は熱く会社のことを語る社長を見ながら親近感を覚えた。会社が居場所 ミス研部を居場所と感じている自分と同じだ。

茶を取つて飲んだ社長は時計を見ると、十一郎たちを見た。

「すまないけど、明日は仲間との交流会があるんだ。準備をしたいから、あと数分で終わりにしようか。そのお菓子美味しいだろう。お客様さまからいただいたんだ。数に限りがあつて、地元の人しか食べられないって話だよ」

ワッカスが一口で食べようとしたのをとめた。まるでネズミのように噛んでいる。

「交流会ですか。それにお客さんから高級和菓子も貰えるなんて、本当にいい雰囲気の会社ですね」

十一郎が言うと社長は、はにかんで笑った。

「交流会といつても私の独壇場だよ。最近、テニスにハマってしまつてね。メタボ対策と理由を付けて、運動不足の社員を引っ張り出しているんだ。年も考えずにやるから、次の日は筋肉痛が酷いんだけどね。だけど、やめられないね」

「テニスなら、私もやったことがあります。初めは手首の使い方がわからなくて、痛めてしまつて……」

社長の話題に入り込んだのは裕貴だった。そういうえば、中学の時にテニス部にいたっけと思い出す。十一郎は運動が嫌いなのに、男子テニス部に入れと強く言われたのだ。

最終的に十一郎が入ったのは将棋部だった。何でそれと言われた覚えがある。相手が動かす駒を予想して最善の手を出す。推理に役立つ経験になるかもしれないと決めたというのが一番の理由だった。「君たちが入社してくれるというのなら歓迎するよ。綾花ちゃん、

いやハ木さんにもよろしく言つといて。私が協力できる」となり、何でもするよ」

十一年前の事件を知つてゐる関係者の協力は大きな力になる。仕事に運動に精力的な社長に見送られながら十一郎たちは応接室から出た。

最後まで社長は「知らないことがあつたら聞いてくれよ」と何度も言つてくれた。

出口でもガラス張りの扉を押して、「気をつけ」と言つてくれる気遣いようだ。最初から最後まで、社長には迷惑をかけてしまつたような気がした。

外に出ると陽はすっかり落ちて、辺りは暗くなりかけていた。部活動を終了して帰る時間だと少し遅い時間だ。

十一郎は、また父さんと母さんに何か言われるかなと感じた。

帰宅時間のためだらう、会社員が歩く姿が多くみられる。車の通りも増えていた。

急に先頭に立つて歩きだしたワックスが、振り返つて満面の笑みを浮かべてみせた。

「いい社長さんだよな。俺、就職活動しても駄目だつたら、あの社長さんの世話になろう。客からの美味しい土産も食べられそうだしね」ワックスがミス研部に入部した理由は推理が好きだからではなく、手作り菓子に釣られたからだ。十一郎は志望動機まで同じかよ、と言ひ掛けたがやめた。

「事務のお姉さんも奇麗だつたし……」

「会社の志望動機まで同じかよ」

つい言つてしまつた。ワックスはいつも突つ込みを待つてゐるのではないかと思う。

そんないつも通りの会話が続いていた時だ。

「社長さん、右利きだつたね」

裕貴が思わぬことを口に出した。いや、社長も十一年前の事件の関係者だ。そこまで気にしなければいけないはずだ。

「テニスをやつているつて聞いたから、同じ経験者として気になつたの。構えが右だつた。だから共犯者としては成立しないね……」

「確かに、思い出すとお茶を飲んでいた手も右だつたな。それに俺は和田の考えることがありますわからなくなつてきた」

十一年前の事件の時、和田には病氣の子供がいた。その治療代を稼ぐために、残業までしていたのにも関わらず、襲撃事件が起きたと同時に妻と子を置いて逃げている。

被疑者の和田と殺された升田。十一年前、和田が受け取つたという保険金千四百万と升田が言つていたといふ十年か前の貸し七百万といふ金額。

車載カメラも壊されていた。そして、今回の事件。どうしても、どす黒い推理に行き着いてしまう。

和田と升田は十一年前の事件の共犯者だつたのではないかと

そして共犯者であるうハ木の母と和田の関係。語らなかつた訳が他にあるのではないか。考えれば考えるほど憂鬱になつてくる。

前回と違つて今回は全員で行き着いた結果だ。十一郎の言葉で裕貴とワックスも悟つたのだろう。視線を落としながら歩いていた。不意に十一郎は振動を感じた。携帯の反応だ。着信名を見ると『イタチ』と出ていた。『バカ息子』といつ着信名にされた貫野へのお返しだ。

知りたくない真実が次から次へと生まれている。その不安からか携帯を取り出して耳に当てるのを、裕貴とワックスは心配そうに見ていた。

「今どこだ。とんでもないことがわかつたぞ。和田のことだ！」

通話状態になると、鼓膜が破れそくなぐらいの声が響いた。貫野の地声は十一分に凶器になると思う。頭一個分、受話器から離しても聞こえるくらいだ。

「和田のこと？　こっちも社長さんからいろいろと聞いたよ。何でも子供がいたとか」

「そのことだ。よく聞け！　和田には確かに妻子がいた。けれど一

人は十一年前に亡くなっている

十一郎は耳を疑つた。亡くなっている 病氣の子供も看病をしていたであろう妻も。

渡された保険金にいい顔をしなかつたという和田。既にその時、妻子は亡くなっていたのではないか。

守る者がいなくなつた。治療費は必要ない。だから戸籍も身分も捨てて、升田から逃げた。

貫野の教えてくれた情報から、推理の引き出しが全て開かれる。十一郎は自分が思い描く推理の中で、口無し和田の姿をよじやく捉えた。

「貫野さん。和田はまだ入院しているんだよな。俺に彼の事情聴取をさせてくれないか。口無しの彼の口を割ることを約束するよ。あと俺が今から言うモノをお願いしたいんだ」

今の時間帯だと病院は面会を許していないだろ。それでも相手は自白した自称犯人だ。緊急で彼と話がしたいと言えば、きっと聞いてくれるはず。

同時に面会者が来ない静かな空間だからこそ、和田が語る環境も構築されている。

絶好ともいえる時間と場所、証拠が揃つた。今しかない。

十一郎は口無し和田の口を割るであろうモノを貫野に告げた。

聞いた貫野は「病院だな」と冷静に言つて電話を切る。ゼロを示した病院の計器のような電話の余韻音を聞きながら、十一郎は空を見た。

十一年前の事件が起きた夜も、こんな感じの空だったのだろうか

先程まで、鮮明に見えていた月が流れてきた雲に隠れて、淡い光を地上に落としていた。

十一郎たちが病院に着いた時には、既に見慣れた覆面パトカーが停まっていた。

車内から外の様子を窺つていたのだろうか。扉が開いたかと思うと貫野が出てくる。

十一郎は貫野を視界に入れながらも、手にした携帯を見て息をついてしまった。

母に、『今日は遅くなる。みんなも一緒に安心して』と、メールすると、

『遅くまで遊んでいや駄目よ』と、返ってきたのだ。

父や貫野は自分を一人前として認めてくれた気がするが、母親にとつて息子はいつまでたつても子供らしい。

癪なので、『大丈夫。父さんに貫野さんと一緒にからつて言つといで』と返した。

後ろを見ると裕貴やワックスも携帯電話を操作している。自分た

ちは高校生だし、親が心配するのも当然なかもなと感じた。

メールを打ち込むスピードが超高速と喻えていいくらいの、裕貴の指がとまる。

「門限過ぎても、プラマイと一緒にメールすると、じゃあ大丈夫ねって返つてくるんだよ。お母さん、プラマイのことは信頼していられるみたい」

「俺もそうだな。刑事と一緒にメールしたほうが、よっぽど心配すると思う」

ワックスに、それは違う意味に捉えられるからじゃないか。と言おうとしたがやめた。

本物の刑事が目の前にいるのを忘れそくなっていた。駆け寄ってきた貫野を見て思う時がある。貫野は子供のような大人といつてもいいかもしない。

「なに、人の顔見て妙な顔してやがるんだよ。お前が言つたモノは持つてきてやつたぞ」

貫野と田代が合つた途端、予想通りの反応が返つてきた。しかし貫野の相棒の文田の姿が見えない。

「文田さんは？ いつも一緒に、珍しいよな」

「俺とあいつが対のようになつて言つた。車の中にはいる。だから、あとは任せた」

聞いた十一郎は、そういうことかと納得した。

全員が事件の解決を望んでいる。縦社会の中で生き、横の者たちも気にする立場である貫野や文田も

「文田さんが車の中にいるのなら、私たちも後から行つた方がいいよね？」

裕貴が覆面パトカーを見ながら言つ。ワックスも同じ気持ちのようで十一郎を真剣な表情で見ていた。

突然、見知らぬ人物が多数現れたら、口無しである和田は更に口を開ざす可能性が高い。

裕貴とワックスの意見を尊重して、十一郎は貫野を見る。すると貫野は、先日とは違う病棟に田代配せをした。

どうやら意識が戻った後、場所を移動したらしい。窓に鉄格子が掛けられているのが見えた。おそらく精神科の病棟だろう。

和田は自殺未遂をしているので、その対処をしたのだと十一郎は理解した。

貫野の足取りが速い。十一郎は半ば駆け足状態で後についた。

「あれから和田の状態はどうなんだ。事件のこととか何か言つてるだから……？」

「相変わらず、俺がやつたの一點張りだよ。けど、お前が言つたモノを見て、奴も慌てるだろうな。隠しきれていくと思つていてるわけだから……」

どうやら病棟には関係者しか知らない緊急の出入口があるらしい。病棟の裏口へ回ると、小さな引き戸を開けて貫野は中に入った。

廊下は薄暗いが、突き当たりは明りが集中している。あそこは控室なのだろう。

いつも通りに大股で堂々と控室に近づいた貫野は、ガラス張りの向こうにいる看護師と言葉を交わした。そして、鍵を受け取ると、また十一朗に目配せする。

長い会話ではなかつたところを見ると、顔パスに近い状態らしい。貫野がいるのだから遠慮することはないが、十一郎は頭を下げながら控室の前を通りすぎた。刑事と一緒にいる高校生を見た看護師の、驚く顔を見るこども出来たのかもしれないが、それは恥ずかしくてやめた。

階段を上がつて和田の部屋に向かう途中、幾つかの部屋の前を通り。扉の向こうから、ぐぐもつた声や唸り声が聞こえてくる部屋もあつた。

「こういった場所に来るのは初めてだろ。閉鎖病棟つていってな。窓には鉄格子、扉には鍵だ。重度の精神病患者が中に入っている。その中でも和田はかなり特例だらうな」

事件の真相を知っている和田は絶対に死なせてはいけない。警察が懸ける威信を見たような気がした。

貫野が立ち止まつたのは、閉鎖病棟のはずれの部分だった。隔離された場所というよりも、関係者が楽に入れりできそうなエレベーターの近くだ。

貫野が鍵を差し込むと、部屋の中で何かが動いたような音が聞こえた。覚醒した和田繁樹と対面するのは初めてだ。十一郎は思わず唾を飲み込んだ。

扉が開かれて中に入るべッドの上に座つている男性が見えた。和田繁樹だ。

和田と田が会つた瞬間、十一郎の頭から構築していた印象が吹き飛んだ。

誰かわからない。高校生の自分に彼は頭を下げるのだ。

やはり和田は共犯を庇つてゐる男だ。どす黒い推理は取り下げる

べきかもしれない。十一朗はそつ感じながら、自分も頭を下げて応えた。

貫野が立てかけてある座イスを出して、十一朗に手渡す。このことから、刑事数人が和田から事情聴取をしていたことがわかつた。貫野は軋んだ音を奏でるイスに腰掛けると、十一朗に構わずに話し始めた。

「気分はどうだ？ 傷の痛みも治まってきたはずだ。そもそも普通の生活に戻りたい頃だろう」

普通の生活に戻れる訳がない。和田は自称、殺人犯なのだ。それでも貫野が言つたのは、共犯のことを早く教えるといつ遠回しのメッセージージに違いない。

問い合わせられた和田は、格子窓の方を見た後、真っ直ぐに貫野を見た。

「私が全てやりました。それが真実です。普通の生活に戻ろうとは思いません。罪を償い、房を出ても粗末な生活をしていくつもりです」

自信のある口調だつた。問い合わせた貫野を真っ直ぐに見たのも、絶対に曲げないという気持ちの表れでもある。

十一朗は居住まいを正した。金属の軋む音が病室内に響く。

「今回の事件について話せないのなら、代わりに十一年前の事件のことを話しませんか」

十一朗の質問に、和田が目を見開いた。

目の前にいる高校生は何者なのか 素性を知らない相手を前にした戸惑いだ。

「僕は刑事部長の息子の東海林十一朗といいます」

更に和田の疑問に答えるように返す。これには貫野も目を見開いた。

刑事部長と聞いたら、和田が警戒するのではないかと感じ取つたためだろう。

本来なら言わなくてもいい情報だ。しかし言つたのには理由があ

る。冷静である和田を動搖させるためだつた。

「刑事部長の息子さんが……何故？」

自分は一連の殺人事件の犯人。和田はそう自分を位置づけていたはずだ。ところが予期せぬ事態が目の前にある。その答えが震えた声だつた。

「貫野刑事、あの証拠を出してくれ」

畳み掛けるように十一郎は貫野に頼んだモノを出させる。

十一郎たちと謎の男であつた和田を結びつけた、綾花の携帯番号が書かれた紙だつた。

「それは……」

和田は初めて見たはずだ。そして、自分が持つていたことを知らなかつた。知ついたら、万年筆のよつに投げ捨てていたはずだろう。

そうでなければ、十一年前の傷を隠すために自殺する理由がなくなつてしまふ。

「あなたが自殺未遂をした時に所持していたものです。この紙から、ハ木和歌子さんの指紋だけが検出されました」

貫野は紙を見せたと同時に、はつきりと告げた。和田の唇が震えた。誰が見ても分かるほど唾を勢いよく飲みこみ、顔面が蒼白になつていつた。

ハ木和歌子の指紋だけが検出された。和田は自分のポケットに入っている紙に気づかなかつた。その理由を考えると、ハ木和歌子が和田の上着のポケットに無理やり押し込んだという結論に達してしまう。

貫野が十一郎を見た。「次はどうするつもりだ?」言葉ではなく、目が問い掛けてきていた。

間違つた選択をしてしまうと、和田は再び口を開ぎてしまつだらう。十一郎は慎重に言葉を選んで搔さぶりをかけようと決めた。

「娘さんの電話番号を書いた紙を、自分を付け回すストーカーまがいの男のポケットに入れよ。そんなことは誰もしませんよね?」

「知らないそんなものは！ 私が一人でやつたんだ。それでいいでしょう！」

和田は吐き出すように叫んでから、両手を貫野に突き出した。

「私に早く手錠を掛けてくれ！」

和田は声を張り上げて懇願した。何故、八木和歌子をここまで底うのか。十一郎には全てが見えていた。

「僕は八木綾花さんと同じ、ミステリー研究部の部員です」

和田の動きが止まる。予想通りの反応だった。

押しこまれていた綾花の電話番号。そして、綾花の名前が刻みこまれたプレゼント用の万年筆。十一年前の事件と和田の妻子の死。命懸けで共犯ではないと言つて守つた綾花の母の存在

そこから導き出された答え。

いつからか、和田にとつて八木和歌子と八木綾花は妻子と同じくらいの存在になつていつたのではないか。

「和田さん。十一年前の輸送車襲撃事件について、詳しく教えていただけませんか」

十一郎が和田に言つた時だつた。靴音が病室内に響き渡る。

目を向けると、そこには文目に連れてこられた八木和歌子。裕貴とワックスと共に来た綾花の姿があつた。

十一郎は貫野に頼んで、二人を呼んできてもらつたのだ。そして、タイミングを見て二人を入室させてほしいと告げていた。

綾花の瞼が赤くなつていた。車の中で母と言葉を交わしたのどうか。唇を震わせて和田を凝視していた。

「私は父がどんなふうに亡くなつたのか知りません。今まで事故だと聞いていました」

綾花が頭をさげた。さげた途端に、涙の滴が零れて床に水玉模様を作成した。

「お願いです。事件のことを教えてください！」

必死の懇願をする綾花に続いて、綾花の母も頭をさげた。一人の行動に十一郎たちよりも和田の方が困惑していた。

「すみません。和田さん……」の子に、あのことを話しました
綾花の母の話を聞いて、和田は小さな声で「そうですか」と言いながら息を吐いた。

続けて十一朗と貫野を見て微かに笑つた。

「お一人には負けました。わかりました。十一年前の事件のことも、いざれは話すことと考えていました。全てを話します。けれど全ては私が」

和田が言い掛けたのを十一朗は、掌を前に突き出してとめた。
和田が言いたいことは分かつていた。「私がやりました」。それが今回の事件に繋がるのではないかという想像もついた。

「今は誰が犯人なのかという話はやめましょう。十一年前の事件は未だ解決していません。その事件を解決に導くことが出来るのは、口を閉ざした和田さん。あなただと思っています」

「そうですね。私が全て悪いのです。お話します」

和田が目を閉じた。十一年前を思い出すため、記憶の歯車を巻き戻しているのだ。

目を開けた和田の瞳には、先程までは見えなかつた決意の光が差したような気がした。

「十一年前、私は輸送会社で働いていました。貴重品を運ぶ仕事なので、隣には必ず相棒がいたんです。その相棒がハ木彰夫さんでした」

和田とハ木の関係がここで繋がつた。いつも同乗していた仲間のため、二人は襲撃事件の被害者となつたのだ。

「ハ木さんは私によく奥さんと子供さんの写真を見せてくれました。私の子供と年は、そんなに変わらなかつた。彼が写真を見せてくれたのは、それが理由でしょう……けれど、互いの環境はまるで違つた。私の妻は白血病患者でした。子供を産む直前に分かつたので、抗がん剤治療はしませんでした。その時は、生まれた子供と骨髄移植が可能なら、妻は助かるという希望がまだあつたんです。けれど型は一致せず、子供は難病を持って産まれた」

社長が和田の子供について話したのを思い出した。治療費がかかること言つていた。

残業をして治療費を稼ぐ和田と、元気で明るい妻子に支えられているハ木。同じ仕事に就いていても、似たような家族構成でも二人の心の内はまるで違つていたのだ。

「それは医療費の助成がされていない病氣でした。子供のために私はどうしても金が欲しかった。残業をして他の仕事にも就きました。しかし治療費が足りない……そんな時、升田が声を掛けてきたんです。いい話があると」

どこからか情報を見つけ出してきた升田が、和田に持かけた話

それが十一年前の事件に繋がるのだろう。

綾花の母は唇を噛み、綾花は体を小刻みに震わせていた。升田という男が犯人だらうと、十一朗は綾花に告げている。それを思い出しているはずであった。

「升田は、自分が輸送車を襲撃する。その時にあんたを刺したら、保険金が下りるはずだと言いました。その代わり、輸送車の積み荷を盗ませると……その話にのつてしまつた私が馬鹿でした。升田が暴力団組員だと知つたのは、その後です」

輸送車襲撃事件の犯人は一人いた。主犯格は升田、共犯は和田。車載カメラが壊れていたのは和田がそうしたからだらう。まさに計画的犯行だつたはずだ。同乗者のハ木彰夫が殺されたこと以外は

「どの場所で荷を下ろすのか。私は升田に伝えました。予定通り、襲撃場所で升田は刃物を出し、私を刺そうとしたんです。その時、予想もしないことが起きた。ハ木が……」

和田の声が震えた。綾花の母は前以つて伝えられていたのだろうか。ハンカチを取り出して顔を覆つっていた。

「私を庇つたんです。お前は逃げる。奥さんと子供のために！　と言われました。その時、私は初めて知りました。ハ木は私の妻と子が病氣であるということを知つていたんです。けれど私はそれを知

らないで、彼を羨ましく思い嫉妬していた。彼が事件に巻き込まれても構わないと思っていた。それが間違いだと気づいた時には既に遅かつたんです……」

聞いた綾花が両手で顔を覆つて泣いた。綾花は言っていた。父との思い出は少ないと　それが和田の話を聞いて鮮明に蘇ってきたようだつた。

綾花の母は綾花を優しく抱き寄せた。それでも綾花の母の手も震えていた。

輸送車襲撃事件の全容が見えた。十一郎の推理が的中した。

十一年前の輸送車襲撃事件の犯人は升田だった

升田は邪魔をしたハ木彰夫を刺し殺した。同時に計画通りに和田も刺した。

罪を犯しても殺人はしない。しかし綱渡りと仇名された男は、強盗殺人をしていたのだ。

強盗殺人は無期懲役か死刑だ。捕まらなかつたことで升田は綱から落ちずに渡り続けた。

しかし、ここで疑問が生じる。何故、和田は事件の全容を今まで黙つていたのか。

十一郎は疑問を和田にぶつけた。

「何故、十一年後の今になつて升田と争い、自殺未遂をしてまで証拠を隠そとしたんですか。十一年前の事件を隠し続けたりしていなければ、あなたは殺人事件を起こさずにすんだはずなのに」

和田は口を閉ざすと、ハ木和歌子と綾花に一瞬だけ視線を向けた。同時に和田の目から涙が零れ落ちた。そして、小さな声で何か言う。全員が聴き取れない震えが混じつた声だ。

「あしながおじさん……」

その時、和田ではなく綾花が声を出した。そして懐から何かを取り出す。取り出されたのは薄汚れた安全祈願のお守りだつた。

「お父さんがいなくなつてから、何故か玄関先に手紙と一緒にいろいろものが届けられるようになりました。運動会近くになると運動靴。

小学校入学前にはランドセル。誰からなのか分からず、母に聞いたことがあります。手紙にはいつも『君のあしながおじさんより』と……今日、母に聞いて初めて、和田さんがそのあしながおじさんだと知りました」

十一郎も裕貴もワックスも和田を見た。貫野と文田も同じ反応をした。

十一年前の事件の直後、和田は妻子を失っている。それが病気だつたとわかった今、和田が何を考え、今までを生きてきたのか見えた気がした。

十一郎は程度の予想をつけながらも、和田を見た。

「輸送会社の社長に聞きました。保険金として千四百万円をあなたに渡したと。そして升田は仲間に七百万を返してもらえると言つていたそうです。もしかしてそのお金は……」

「必要なくなりました。私が重傷で入院している時、娘は死にました。苦しんでいたのに、最期はすぐだったそうです。娘を追うよう妻も天国に逝きました……私が彼女たちを死なせてしまつたようなものなんです。馬鹿なことをやって、娘の最期に立ち会えなかつた。妻が一番苦しい時に隣にいてやれなかつた。私は生き甲斐をなくしました。その時、新聞である記事を見たんです。輸送車襲撃事件の被害者のが書いてありました」

十一郎は図書館で見た縮小版の新聞記事を思い出していた。

最愛の妻と子を亡くした男が、最愛の夫を亡くした妻と子を見る。その時、和田の心の中に何が生まれたのか
黙つていた貫野が居住まいを正して、和田に聞いた。

「償いですか……」

最愛の者を亡くした被害者の気持ちは、はかり知れない。亡くした者は一度と帰つてこない。どんなに償つても許されることではない。

しかし、和田は知っていた。最愛の者を亡くす苦しみだけは

「せめて、せめてハ木の娘さんが大学に進学するまでは」と考えてい

ました。時が来たら自首するつもりでした。そんな時、捕まつていった升田が出てきたと知りました。このまま私が彼女たちの近くにいたら、必ず被害が及ぶ。そして、自首を決めて電話をかけたんです」

電話をかけた相手が綾花の母だったのだろう。

和田は綾花の母を呼び出して、十一年前の事件の真相を語ったに違いない。その時、彼女はどんな反応をしたのだろうか。

複雑な感情の中にいたに違いない。しかし、綾花の母も最愛の夫を亡くした身だ。和田の気持ちを察し、せめて自分の娘にも真実を語つてほしいと携帯の電話番号をポケットに押し込んだかもしない。

ところが、和田はそこで大きな息を吐いた。真剣な表情だった。

「ハ木さん、娘さんの電話番号を無理やり書かせてすみませんでした。あの時、私は手袋をしていたので、メモからはハ木さんの指紋しか検出されなかつたのでしょう」

ここで和田は再び頭を下げながら、十一郎の推理を覆す言葉を発した。

和田は何があつても、今回の事件の共犯をハ木和歌子とは言わないつもりだ。全ての罪を受け止めようとしている。

十一郎は和田の中に、命を懸けても償うといつ覚悟を見た。

「もういいんです。和田さん！」

瞬間、綾花の母が声を上げた。大粒の涙を流しながら、唇を噛んでいた。そして、綾花を抱き寄せながら、「お父さんのこと、黙つていてごめんね」と涙声で言った。

「夫を刺した男を殴つてやつたのを、私は後悔していません。あなたがやらなくても、升田は私が殺していました。そして、私は和田さん。あなたを十一年前の事件の共犯だとは思っていないんです……一番許せないのは升田。そして、あなたを命懸けで守りたとした夫を私は誇りに思っています」

ハ木和歌子が全てを語った途端、和田は大声を張り上げながら泣いた。

十一年前の罪を自分は償いきれているのか。そんな悩みと感情が爆発したかのような声だった。

何度も「すまない。すまない」と連呼した。綾花の母と綾花に言ったのか、命を落としたハ木彰夫に詫びるものだったのか。少なくとも自分の罪から逃げる、表面上の謝罪ではなかつた。今までの彼の行動が、それを証明していた。

息を吐いた十一朗を貫野が見た。よくやつたということなのだろう。

しかし、事件は解決してはいない。十一年前に繋がる今回の事件。升田が死んだ夜の話がまだだ。

「あの夜、私が仕事場で休憩している時に電話がありました。着信を見ると公衆電話からでした。私の携帯に公衆電話でかけてくる人は和田さんだけです。電話を取ると彼は、大事な話がある。近所の公園で会えないかと私に言いました」

数日前の記憶を辿るように、綾花の母が語り始める。

全員視線が彼女の口に集中する。十一朗は望んでいた事件の真相を前に、思わず息を呑んだ。

近くを通る電車の音と通過を告げる踏切の音が、事件の夜を思い出させるかのように微かに聞こえていた。

電車の通過音が徐々に遠ざかっていく。踏切の音が途切れると、皆の呼吸音だけが病室に響いていた。

静まる時を待つていたのだろうか。不意に綾花の母が和田を見た。話してもいいか　彼女の目が和田に語っていた。

十一年前の襲撃事件は、ハ木親子や和田の中では、まだ解決していないだろう。何をしてもハ木彰夫は帰ってはこない。両者の時間は止まつたままのはずだ。

それでも、十一年間の心と心の語り合ひは無駄ではなかつたのだ
るべ。

全てを察したかのように和田は首を縦に振つて応えた。
以心伝心　他人でも繋がる心がある。一人の間にはそれを感じた。

綾花の母は、十一郎と貫野の方に顔を向けると口を開いた。

「和田さんを知つたのは、綾花の幼稚園の運動園の運動会の前日です。保険金は下りていましたが、専業主婦だった私は仕事を探すのに苦労していました。収入がほとんどゼロという不安な生活の中で、綾花に運動靴を買ってあげることができなかつた。親として情けなくて、涙が出ました。そんな時、運動靴が届けられたんです」

玄関先に手紙と一緒にいろんなものが届けられるようになつた。
綾花はそう言つていた。

和田があしながおじさんとして、初めて届けたものが運動靴だつたのだろう。

「扉を開けると知らない男性がいました。そして受け取つてくださ
いと箱を渡されたんです。対応に困る私に男性は、ハ木さんの同僚の和田ですと自己紹介してくれました。箱の中には『君のあしながおじさんより』という手紙がありました。嬉しかつた……彼の好意に感謝しました。それから彼は、いろんなものを買っては届けてく

れたんです」

綾花の母が和田のことを持ち上げた。親密な関係になつてているのだということが窺えた。

この時、綾花の母は、和田が輸送車襲撃事件の被害者であると知らなかつたはずだ。被害者の綾花の母からしてみると、夫が死んだ事件の新聞を見る気にもならないだろう。しかも犯人は逃走中。やり場のない怒りをどこにぶつけたらいいのか。

苦しんでいたに違いない。事件の証拠をつかめない警察も憎んでいたことだろう。救いの手を差し伸べた和田の存在は、綾花の母には大きな存在だったであろうと想像がついた。

「その時から彼との交流が始まりました。彼は誠実な人で、男と女の関係を求めることがなかつた。そのせいでしょうか。私は逆に彼に惹かれていきました。そんな時、彼の口から聞いたんです。妻子がいたこと。襲撃事件の時に同乗していたこと。重傷を負つて犯人の顔を見ていないこと。そして、私にぶ厚い封筒を渡してきました」十一朗は封筒の中が何であつたのかを察した。和田が必要なくなつたという保険金、千四百万円の一部だらう。

和田はハ木親子の将来を保証する代わりに、犯人の顔を見ていいといふ嘘をついた。犯人の升田が捕まるとき、その口から共犯の自分の名前が出ることは確実だ。

せめて綾花が成長するまでは嘘を、償いのために金をそんな気持ちの中で和田は、嘘をついた自分を慰めていたのかもしない。

同時に和田は妻子がいたと告げて、綾花の母との距離を保つた。男と女の関係になることを嫌つたのだろう。

綾花の母が息を吐いた。

十一年間もの出来事を思い出し語るのは、相当の辛苦を伴つのだろう。代わつて和田が話に加わつた。

「封筒を渡したのは、綾花さんが高校に合格した時です。償いきれないのでしょうが、肩の荷が下りた気がしました。けれどその頃でし

た。升田が刑務所から出たと知ったのは……あいつはハイエナのような男です。組の情報網を使って、必ず私を見つけようとする。自首しなければ一人が危険と感じ、会うのはこれが最後と決めて、万年筆を予約しました」

万年筆を見つけたのはミステリー研究部全員の手だ。裕貴もワックスも綾花も、エンジ色で『AYAKA・Y』と刻印された現物を見ている。

あの万年筆には和田の最後の償いの気持ちが込められていたのだ。裕貴、ワックス、綾花は息を呑んで聞いていた。

万年筆の予約で和田が自分の名前ではなく、八木和歌子名義にしたのは、升田の追跡をかわすためだったのだろう。その時は、升田が現れるなどとは考えもしなかったはずだ。

そして、万年筆を受け取った直後に、綾花の母に電話をかけたに違いない。

「彼女に何も言わず自首すると迷惑をかけるだけです。呼び出して全てを語りました。今までの関係はなかつたこと。忘れるように」と……」

綾花の母がハンカチを取り出して涙拭いた。

公園に呼び出された時、綾花の母は何を思ったのだろうか。電話をかけてきた和田相手に、今度こそ真剣な付き合いになるのではと、期待していたのではないか。娘の電話番号を書いたメモを渡すつもりでいたのではないか。

電話番号の紙を押し込んだのはこの時だろう。和田はそれを認知できなかつた。

聞いて貫野が感心するかのような声が混じつた息を吐いた。目の前にいる和田の考えに驚嘆したようだつた。

「忘れるように……犯人隠匿の容疑を、ハ木さんがかけられるのではと思ったわけですか」

十一年前の事件の真相を知る和田と関係がある八木和歌子。もしこれを警察が聞いたらどう思うだろうか。

ハ木和歌子は夫を殺させて保険金を受け取り、同乗者の和田と関係をもつた。警察はそんな疑いを持つだろ。

綾花の母が口無しであつた理由がわかつた。全てが和田の計算だ

つた

和田は貫野の質問に「そうです」とだけ応えると、フツと田を細めた。刺された傷が痛むのか、それとも刺された記憶を引き出そうとしているのか、傷を押さえた。

「話している時に升田が姿を現しました。升田は全てを知っていたのでしょう。激高して、絶対に自首させないと叫びました。闇の中で光る物が見えました。刃物だ。そう思った時には刺されていました」

忘れかけた事件を繋げる凄惨な出来事に、和田も綾花の母も混乱したはずだ。

いや、それ以上に綾花の母は升田を見て怒りを覚えたに違いない。夫を殺した男が、今度は信頼していた男を刺した。やることは決まつていたのだろう。

綾花の母が大きく息を吸つた。

「許せない。殺してやると思いました」

感情を露わに、唇を噛み、両手を握つていた。

文目が証拠のメモを取つてはいる。筆の動きが止まらない。

貫野はメモを覗きこむと、綾花の母を見た。

「凶器はやはり鉄パイプですか。確認ですが、殴った構えは？」

綾花の母が動きで示した。左利きの構えだ。左後頭部を殴打したというのに間違いない。虚偽発言ではないといふことが証明された。「升田は殴られた頭を抱えながら、私を見ました。てめえ、殺されえのか。そう言つて向かってきました。その瞬間でした。彼が……自分が刺されたナイフで、升田を刺したんです。そして私に逃げろと言いました」

綾花の母はそう言つと、口を閉ざした。彼女が知る事件の情報はここで終わりだ。

全員が今度は和田を見た。事件現場に一人残つた和田は、何を考え行動したのか

「升田が倒れるのを見た私は、まず鉄パイプの指紋を取ろうと思いました。懐からハンカチを取り出そうとした瞬間、生温かい物に触れました。その瞬間、終わつたと感じました。不思議なものです。その後は彼女に繋がる証拠を全て消さなくてはいけないと必死でした。後は刑事さんがあつしやつた通りです」

万年筆で遺書を書き、電車に飛び込み自殺して古傷を隠そうとした。和田の計画はそこまでは完璧だつたはずだ。しかし彼は死なかつた。

激突した瞬間、昏倒して電車の間に挟まれた。

結果、綾花の電話番号が書かれた紙が見つかり、十一年前の古傷まで判明した。

もし、綾花がミス研部の部員でなければどうだつただろうか。和田が死んでいたらどうだつただろうか。

貫野が小さく舌打ちをして十一郎を見た。「刑事さんがあつしやつた通り」と和田が言つたのは、十一郎が貫野に聴取させたことだ。内心複雑そうな顔をしていた。

和田は傷に触れていた手を見つめると、拳を握りしめた。

「私が死ねなかつたのは、天国のハ木さんが許さなかつた。そういうことでしょう。怨まれて当然のことでしたんです。死んでも償えない重い罪です」

和田の言葉を聞いて、綾花の母が口を開けかけた。

同時に十一郎は、それを見て立ち上がつた。

「何故、悪い方にしか考えないんですか！　あなたがやつたことは確かに許されない罪だ。けれど、あなたは後悔するだけで目の前を見ていられない。顔を上げてください。今、目の前にあるのはなんですか！」

十一郎の叫びに和田が肩を震わせた。顔を上げた和田の手にハ木親子が手を重ねた。

和田は忘れていたはずだ。周りにいた者たちの温かさと共にいた時間を

見つめ合った三人の視線は、言葉以上の見えない心のやり取りをしていた。

二人の肌に触れた和田は穏やかな表情をしてから、十一朗を見た。その目は切迫した犯罪者の目ではなかつた。

「刑事部長の息子さんと言いましたよね。十一年前、私があなたのような刑事さんを前にしていたら、私の考え方も変わっていたのかもしれません。お父さんの後を継がれるのでしょうか……日本の未来も、まだまだ捨てたものではないですね」

次の世代へ それが、あしながおじさんとして、綾花を支えてきた男の心からの想いだった。

聞いた十一朗は、自分は後を継ぐのだと改めて実感した。その時、ワックスが身を前に乗り出した。

「綾花さんの夢は、刑事なんだそうです！」

メール交換をしていたというワックスだ。きっと十一朗の知らないうちに、綾花といろいろと言葉を交わしていたのかもしれない。張り詰めていた空気が変わつた。止まつていた時計の針が動き出していた。

文目の筆が止まり、貫野はいつも通り深く席に腰掛けた。

「和田さん。後は取調室で語つていただけますね」

和田は首を力強く縦に振つた。口無しが口無しではなくなつた瞬間だつた。

メモを取つていた文目も息を吐くと、それを懷にしまつ。格子窓を見ながら、大きな伸びをした。

「随分と暗くなりましたね。けれど安心しました。事件発生と入電があつた時にはどうなることかと……男が刺されて唸つている。自殺未遂をした男がいる。二つの事件が同時というのは、初めて聞いたことでしたし」

「文目さん、今何て言つた？」

十一朗は文目のかたを聞いて違和感を覚えた。貫野に聞いていたことと話が違う。

文目は不思議そうな顔をしながら、再び口を開いた。

「いや、一つの事件が同時というのは、初めて聞いたことでしたしと……」

「その前だよ。男が刺されて唸つていて、そんなこと初めて聞いたぞ！」

十一朗の叫びに貫野が立ち上がった。貫野も気づいたのだ。この事件にはまだ先がある。

「くそつ、偶然にしてはおかしいと思ったよ。和田さん、あなたが電話をかけたのはハ木和歌子さんだけではないですね」

貫野の質問に和田が困惑する。しかし、それは一瞬だった。和田は目を大きく見開いた。

動いていたと思っていた時計の針は、まだ止まっていたのだ。

貫野が文目の肩を叩いて促した。すぐに文目はハ木親子に病室を出るように声をかける。

十一朗も裕貴とワッククスを見た。数時間前を思い出し、心臓が苦しいほど鳴り響いているのを感じた。

「この事件の犯人は和田さんでもハ木さんでもない。あいつだ」

十一朗は感情を必死に抑えながら、ミス研部員全員に視線を巡らせてから告げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8921v/>

十一ミス研推理録2 ~口無し~

2011年11月20日03時23分発行